

長	野	県		
埋	蔵	文	化	財
セ	ン	タ	ー	
年	報		25	

2008

財団法人長野県文化振興事業団
長野県埋蔵文化財センター

長野県埋蔵文化財センター年報25

2008

財団法人長野県文化振興事業団
長野県埋蔵文化財センター





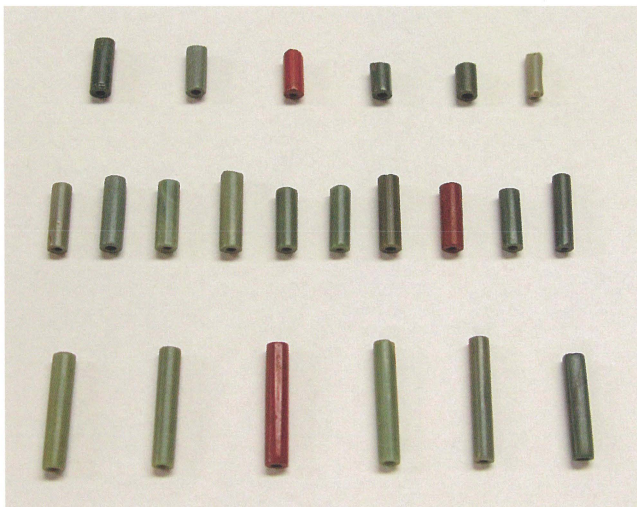
1 礫床木棺墓群全景（真上から）



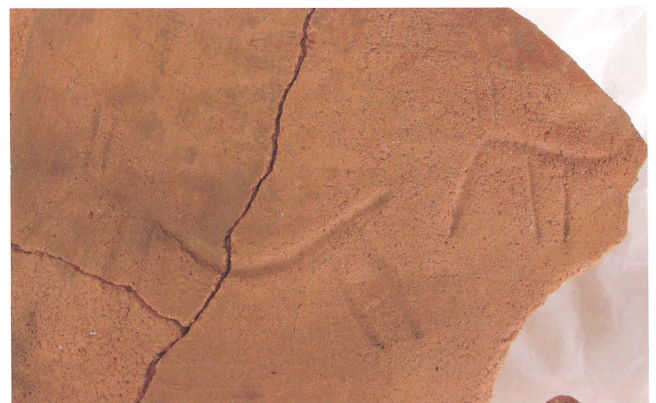
2 礫床木棺墓群全景（西から）



3 大型礫床木棺墓 S M01



4 S M01出土管玉



5 シカ絵線刻土器



6 1号銅鐸



7 2号銅鐸



8 3号銅鐸

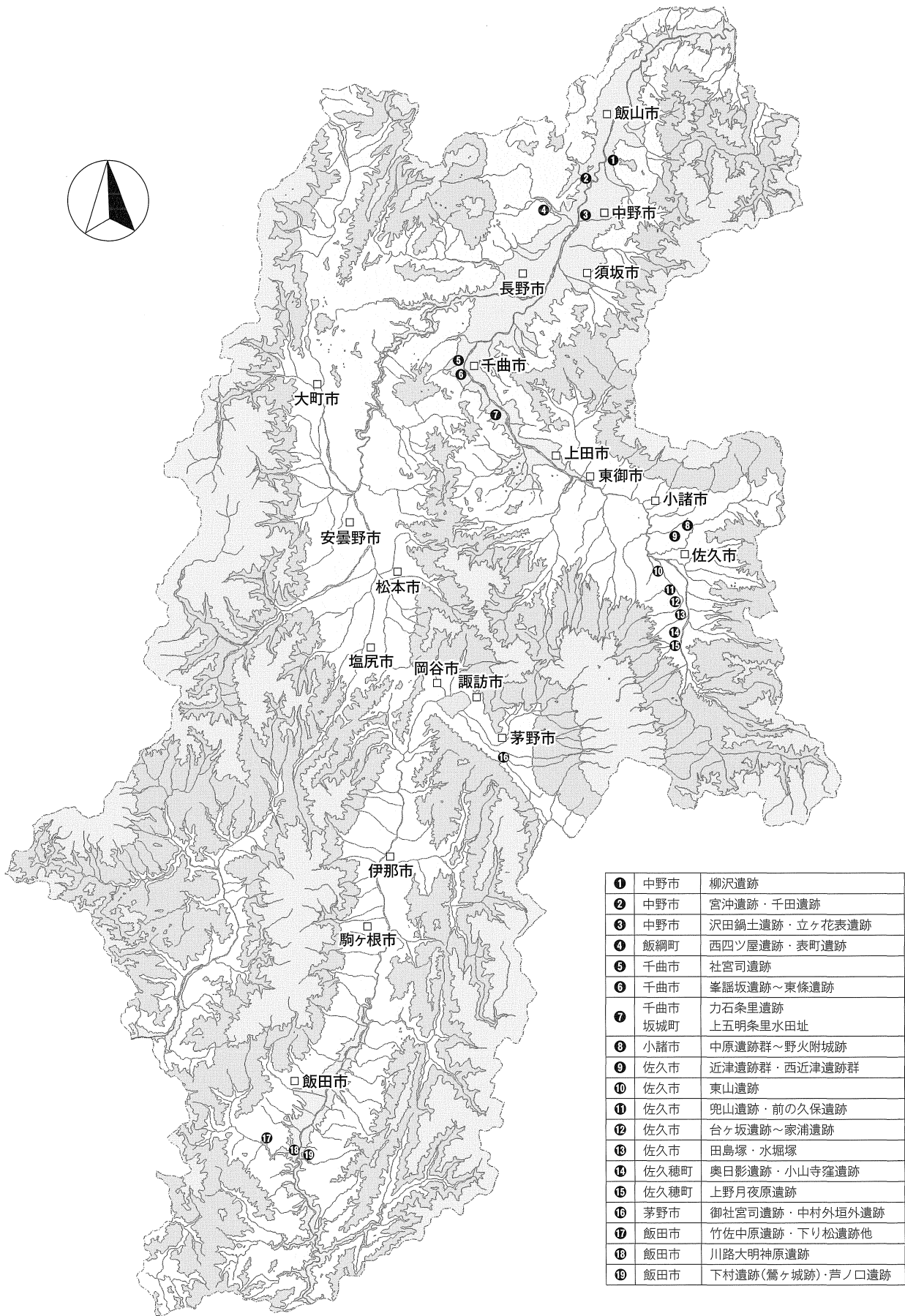
目 次

口絵写真

- ・中野市 柳沢遺跡 礫床木棺墓群全景（真上から）
- 同 礫床木棺墓群全景（西から）
- 同 大型礫床木棺墓 S M01
- 同 シカ絵線刻土器
- 同 S M01出土管玉
- 同 1号銅鐸
- 同 2号銅鐸
- 同 3号銅鐸

目 次

I	2008年度の事業概要	1	V	研修、資料調査などの概要	30
II	発掘調査の概要	2	(1)	講師招へいなどによる指導	30
(1)	柳沢遺跡	3	(2)	全埋協等への参加	31
(2)	立ヶ花表遺跡	8	(3)	研修および資料調査	32
(3)	上五明条里水田址	10	(4)	考古学関係研究会・研修会・講演会 での発表	32
(4)	近津遺跡群	12	(5)	県内市町村および関係機関への協力・ 指導	34
(5)	西近津遺跡群	14	(6)	学校への協力・指導	34
(6)	田島塚・水堀塚	18	(7)	資料等貸与一覧	35
(7)	小山寺窪遺跡	20	VI	組織・事業の概要	36
(8)	下村遺跡（鶯ヶ城跡）	22	(1)	組 織	
III	本格整理作業遺跡一覧	24	(2)	職 員	
(1)	表町遺跡・西四ツ屋遺跡	25	(3)	事 業	
(2)	東條遺跡	26			
(3)	中原遺跡群・野火附遺跡・野火附城跡	27			
IV	普及公開活動の概要	28			
(1)	展示会・講演会	28			
(2)	現地説明会	29			
(3)	ニュース ～みすずかる～の発行	29			



①	中野市	柳沢遺跡
②	中野市	宮沖遺跡・千田遺跡
③	中野市	沢田鍋土遺跡・立ヶ花表遺跡
④	飯綱町	西四ツ屋遺跡・表町遺跡
⑤	千曲市	社宮司遺跡
⑥	千曲市	峯謡坂遺跡～東條遺跡
⑦	千曲市 坂城町	力石糸里遺跡 上五明糸里水田址
⑧	小諸市	中原遺跡群～野火附城跡
⑨	佐久市	近津遺跡群・西近津遺跡群
⑩	佐久市	東山遺跡
⑪	佐久市	兜山遺跡・前の久保遺跡
⑫	佐久市	台ヶ坂遺跡～家浦遺跡
⑬	佐久市	田島塚・水堀塚
⑭	佐久穂町	奥日影遺跡・小山寺窪遺跡
⑮	佐久穂町	上野月夜原遺跡
⑯	茅野市	御社宮司遺跡・中村外垣外遺跡
⑰	飯田市	竹佐中原遺跡・下り松遺跡他
⑱	飯田市	川路大明神原遺跡
⑲	飯田市	下村遺跡(鶯ヶ城跡)・芦ノ口遺跡

図1 平成20年度 調査・整理対象遺跡の位置

I 2008年度の事業概要

今年度は9件の開発事業にかかる発掘・整理作業を受託し、速報展等の自主事業を行った。

発掘調査のうち、調査の対象となった遺跡は20箇所、総面積約127haにのぼる。また、32遺跡の整理作業を進め、4編の報告書を刊行した。事業費総額は751,314千円（対前年度比4%減）である。

以下、時代ごとに発掘成果を概観してみよう。

■縄文時代

土器片が散発的に出土していた**西近津遺跡群**（佐久市）では、発掘調査最終年度になって初めて中期後葉の竪穴住居跡2軒を確認できた。

柳沢遺跡（中野市）では、昨年度に続き敷石住居跡2軒を調査したほか、列石や土坑墓、貯蔵穴など中期末から後期初頭の遺構が集中的に見つかった。

■弥生時代

東日本で初めて銅戈7本と銅鐸1点の青銅器埋納坑を発見した**柳沢遺跡**では、新たに銅戈1点、銅鐸4点を加えることになった。さらに礫床木棺墓2群20基、竪穴住居跡6軒など、青銅器埋納坑を巡る弥生集落の一端が明らかとなった。

平成18年度に後期の超大型竪穴住居跡を確認した**西近津遺跡群**では、調査区南側に広がる大集落とは別に、湧玉川沿いに別個の集落が展開することがわかった。

近津遺跡群（佐久市）では、次の古墳時代にかかる時期にかかる竪穴住居跡12軒や円形周溝墓2基を確認した。調査区の中央から西側にかけて居住域が広がるのに対して、東側に墓域がまとまる。

■古墳時代

上五明条里水田址（坂城町）では、6世紀代の竪穴住居跡4軒を検出したほか、調査区北西端の流路跡から円筒埴輪や馬形埴輪の破片が見つかった。

6～7世紀代の**西近津遺跡群**は、伝統的な竪穴住居跡に大規模な高床構造の掘立柱建物跡が加わり、弥生時代から続く集落の様相が一変する。

■奈良・平安時代

立ヶ花表遺跡（中野市）は、高丘古窯址群に8世紀代の登り窯3基を追加することになった。うち1基は焼成部から燃焼部まで完存し、須恵器大甕の焼成に用いていたことが明らかとなった。

西近津遺跡群では8世紀代に掘削された流路が調査区を縦断し、以降11世紀代までの竪穴住居跡

や掘立柱建物跡が広がる。流路や竪穴住居跡からは「大井」墨書土器が散発的に出土した。また、集落内には灰釉陶器の埋納土坑や馬墓などもある。

柳沢遺跡では9世紀後半を中心とする41軒の竪穴住居跡を確認し、高社山麓では最大の古代集落となった。

上五明条里水田址では条里型地割によって整備された9世紀代の水田址と、その上層に形成された10世紀末から11世紀初頭の集落跡を確認した。集落跡には、八稜鏡と鉄鐸を伴う竪穴住居跡や掘立柱建物跡などを調査した。

小山寺窪遺跡（佐久穂町）は、町教委が台地上で五輪塔群を調査しており、その南斜面で平安時代から中世の竪穴住居跡や掘立柱建物跡が見つかった。

前・中期の古墳と目されていた**田島・水堀塚**（佐久市）は、いずれも奈良・平安時代以降に構築され、その後変化が加わった塚であることが確定した。

■戦国・江戸時代

鶯ヶ城跡（飯田市）では、北側主曲輪付近と南側尾根先端部から埋没していた堀が見つかり、西側斜面には3箇所の小規模な曲輪が認められた。出土遺物から築城時期は16世紀代と想定できる。

また、**小山寺窪遺跡**では、戌の満水により廃絶したと想定される水田跡を確認した。

整理作業では、縄文時代の落し穴や矢筒城跡に隣接する戦国集落の**表町遺跡**（飯綱町）や、8世紀以降忽然と姿を消す古代集落**野火附遺跡**（佐久市）、中世諏訪社の御射山神事との関わりが想定される**御社宮司遺跡**（茅野市）、弥生後期に至り丘陵部に集落を展開した**森林遺跡**（飯田市）などの報告書を刊行した。また、県内最古級の石器群を出土した**竹佐中原遺跡**や縄文集落の**川路大明神原遺跡**（飯田市）、保存処理を終了した**社宮司遺跡**（千曲市）六角木幢も、来年度刊行する見通しがついた。

自主事業の速報展では、**柳沢遺跡**の銅戈・銅鐸出土を期に、信州の弥生青銅器をメインにした参考展示を含め、平成19年度の出土資料250点を公開した。長野県立歴史館、伊那文化会館あわせて14,987名の来館者で賑わった。また、**立ヶ花表**や**鶯ヶ城跡**をはじめ5遺跡で見学会を開催した。

Ⅱ 発掘調査の概要

遺跡名	所在地	事業名	面積㎡	調査期間	時代・内容	主な遺物	
やなぎ さわ 柳 沢	中野市	千曲川柳沢築堤	11,200	4月17日～ 12月5日	縄文時代：住居跡、列石跡、埋甕、土坑。弥生時代：礫床木棺墓、竪穴住居跡、土器埋納坑、土坑、水田跡、溝跡。古墳時代：遺物集中。平安時代：竪穴住居跡。	縄文時代：土器、石器（石棒、玉ほか）。弥生時代：土器（シカ絵線刻土器ほか）、石器（管玉、勾玉ほか）、青銅器（銅鐸、銅戈）。古墳時代：土師器。平安時代：土師器、須恵器、紡錘車。	
まわだ なべつち 沢田鍋土		北陸新幹線	1,120 (確認調査)	6月9日～ 6月13日	遺構・遺物なし、B区は削平されていた。	なし	
たて が はなおもて 立ヶ花表			1,600	6月23日～ 10月31日	奈良時代：窯跡3基	旧石器？：石器、弥生時代：土器、奈良時代：須恵器・土師器、窯体	
ちからいしじょうり 力石条里	千曲市	(主)長野上田線 力石バイパス	266	4月30日～ 12月12日	弥生時代後期～古代：溝跡	弥生時代：土器。	
かみ こみょう 上五明 じょうり すいでんし 条里水田址	坂城町		10,382	4月11日～ 12月12日	弥生時代後期：竪穴住居跡。古墳時代：竪穴住居跡、溝跡。平安時代：竪穴住居跡、掘立柱建物跡、溝跡、水田跡。中世：溝跡	弥生時代：土器。古墳時代：土師器、須恵器、埴輪。平安時代：土師器、須恵器、金属製品（銅鏡、鉄鐸）。中世：内耳鍋	
ちか つ 近 津	佐久市	中部横断自動車道	23,160	5月22日～ 12月22日	縄文時代：土坑（陥穴）。古墳時代：竪穴住居跡、円形周溝墓、土坑。平安時代：竪穴住居跡。時期不明：溝跡	縄文時代：土器、石器。古墳時代：土器、鉄鏃、土製紡錘車。平安時代：土師器、刀子、鉄製紡錘車、人骨ほか。	
にしちかつ 西近津			4,000	6月2日～ 12月22日	縄文時代：竪穴住居跡。弥生時代：竪穴住居跡、円形周溝墓、土坑。古墳時代：竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土坑。奈良・平安時代：竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土坑、流路跡。中世：溝跡。	縄文時代：土器、石器。弥生時代：土器、石器。古墳時代：土師器、須恵器、石製模造品、耳環、鉄鏃。奈良・平安時代：「大井」刻書・墨書土器。土師器、須恵器、灰釉陶器、銭貨、牛馬骨。中世：牛馬骨。	
ひがし やま 東 山			7,000 (確認調査)	10月6日～ 11月19日	縄文時代、中世	縄文時代：土器、石器。中世：青磁片	
かぶと やま 兜 山			4,000 (確認調査)	11月10日～ 12月16日	古墳時代：古墳石室（新発見）	縄文時代：土器、石器。古墳～平安：土器	
まえのくぼ 前の久保			3,000 (確認調査)	11月25日～ 12月16日	弥生時代：竪穴住居跡	縄文時代：土器、石器。弥生時代：土器	
だい が さか 台ヶ坂			6,040 (確認調査)	8月25日～ 9月1日	縄文時代：遺物散布地、確認調査の結果遺構なく、遺物も極微量であった	縄文時代：土器、石器	
かみたき なかたき 上滝・中滝・ しもたき 下滝			10,540 (確認調査)	7月7日～ 7月15日	ほ場整備により削平を受けており、遺構・遺物なし	なし	
や うら 家 浦			10,620 (確認調査)	7月28日～ 8月7日	古代：遺物散布地、ほ場整備により削平されており、遺構なし	古代：土器	
た じまつか 田島塚			500	6月2日～ 10月2日	古代～近世：塚 (調査後田島古墳より名称変更)	縄文時代：石器、古代以降：土器、陶磁器、銭貨、鉄製品	
みずぼりつか 水堀塚			500	6月2日～ 10月2日	古代～近世：塚 (調査後水堀古墳より名称変更)	縄文時代：土器、石器、古代以降：土器、陶磁器、銭貨、鉄製品	
おくひかげ 奥日影			2,190	6月23日～ 8月11日	古代？：掘立柱建物跡、土坑。古代～近世：溝跡。	縄文時代：黒曜石剥片。古代～近世：土器、陶磁器	
こやまてらくぼ 小山寺窪			佐久穂町	4,200	9月16日～ 12月17日	縄文時代：土坑。古代～中世：竪穴住居跡、掘立柱建物跡、井戸跡。中世～近世：水田跡。	縄文時代：土器。平安時代：土師器、須恵器。中・近世：陶磁器
うえのつきよはら 上野月夜原			10,900	5月22日～ 6月30日	縄文時代？：土坑	縄文時代：土器。古代：須恵器	
しも むら 下 村 うぐいすがじょうせき (鶯ヶ城跡)	飯田市	一般国道474号 飯喬道路	7,607	6月30日～ 12月9日	戦国期の山城。斜面に曲輪、切岸、堀。裾部の旧河道跡は水田の可能性がある。	瀬戸美濃の天目茶碗・丸皿・すり鉢、内耳土器、近世陶磁器、硯、銭幣	
あし くち 芦の口			7,860 (確認調査)	8月26日～ 9月12日	水田層が確認されたが、時期不明。来年度以降、本格調査	なし	

(1) やなぎさわ 柳沢遺跡

(千曲川柳沢築堤関連)

所在地及び交通案内：中野市大字柳沢字屋敷添
国道292号線古牧橋の南交差点東約600m

遺跡の立地環境：高社山西麓の扇状地。南部は夜
間瀬川沿いの低地、北部は千曲川東岸に立地

発掘期間等

調査期間	調査面積	調査担当者
20.4.17～12.5	11,200㎡	綿田弘実 市川隆之 廣田和穂 白沢勝彦 大沢泰智

検出遺構 () 内は18～20年度総数

遺構の種類	数	時期
住居跡	50 (52)	縄文2、弥生6、平安40他
列石	1 (1)	縄文
遺物集中	40 (40)	弥生22・古墳7他
溝跡	26 (71)	弥生8、中・近世18
焼土跡	9 (11)	弥生2、古墳1、中・近世6
礫床木棺墓	20 (20)	弥生20
土坑	1,031 (2,246)	縄文11、弥生12、平安以降1,008

出土遺物

遺物の種類	時期・内容
土器・陶磁器	縄文、弥生、古墳、平安（土器）、中・近世（陶磁器）
石器	縄文（打製石斧、凹石、石錘）、弥生（石鏃、太形蛤刃石斧、扁平片刃石斧）
石製品	縄文（垂飾、石棒）、弥生（管玉、勾玉）
青銅器	弥生（銅鐸39片、銅戈1片）
青銅製品	近世（銭貨）

調査の経過

柳沢遺跡は、千曲川をのぞむ高社山麓の西向き扇状地に立地する広大な遺跡である。調査地点は遺跡範囲西端に相当する千曲川・夜間瀬川合流地点東岸で、南北延長約800mに及ぶ築堤用地である（図2・5）。標高は320m前後である。

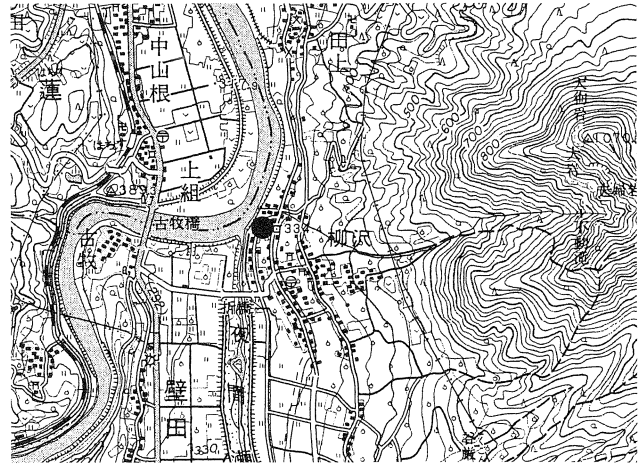


図2 柳沢遺跡の位置（1：50,000中野）

平成18（2006）年度から記録作成目的の発掘調査が、夜間瀬川上流側の1区で開始された。

19年度は北に隣接する延長約200mの2～7区と、更に北へ100m隔たる8区の本調査、及び10区以北の確認調査を行った。10月17日、4区で銅戈が出土し、銅鐸1点、銅戈7点を埋めた青銅器埋納坑が検出され、11月には5・6区で礫床木棺墓群が確認された。冬季目前の現場作業を避け、11月末青銅器埋納坑を切り取って県立歴史館へ搬送し、その他の弥生時代遺構は調査を凍結した。

記録保存・現状保存等の保護措置が未定のため、今年度調査は当初プレハブ用地とした9区以北から着手し、弥生時代に関しては遺物包含層の掘削まで行い、遺構は検出状態にとどめた。記録保存の措置が決定した9月以降、前年度中断した7区以南を含め、弥生時代遺構調査に着手した。

列石をもつ縄文集落

調査範囲北部の滝ノ沢川南に位置する8・12・13区には、縄文中期末葉から後期初頭に属する住居跡、埋甕、列石、土坑が分布する（図3）。住居跡2軒は石囲炉と敷石の一部が残存したものである。ほかに土器を埋設した炉の痕跡もある。埋甕が5基見られるが、屋外か屋内か検討を要す。列石は人頭大礫を、千曲川側が開く長径約8mの]状に配する。千曲川に近い13区西側に集中して、貯蔵穴と推定される直径1～1.8m、深さ50cm以上の土坑9基が分布する。ほかにいわゆる甕被葬と思われる土坑墓らしいものも見られる。

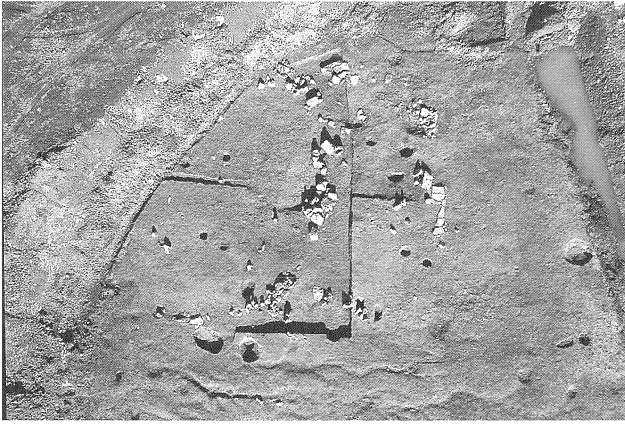


図3 縄文時代の列石・敷石住居跡（13区）

弥生時代の遺構分布

弥生時代の遺構・遺物は、1区から15区南部まで延長600m近い範囲に分布する（図5）。南側の1～3区では低地の水田跡と、それに伴う等高線に沿った水路跡が検出された。水路は2回作り変えられている。水田跡は3区南端で西側用地外に外れるため、更に北側に広がっていた可能性が高い。

青銅器埋納坑は4A区に位置する。南側の水田跡と北側の礫床木棺墓群との空間には数基の土坑が散在するのみである。宅地利用による攪乱の影響もあって、東側ほど遺物も少ない。5区北端から6A区は礫床木棺墓が集中する墓域となる。

6区以北は高社山から発生した土石流末端部の礫層が舌状に伸びている。排水のため現水路を残して区分した調査区境界部分には土石流間の窪地が埋没し、特に7区南半部は顕著な湿地である。7区の南西向斜面は弥生中期から古墳前期に至る土器等の廃棄場所である。7区北部では礫床木棺墓2基も検出された。



図4 弥生時代中期の住居跡（SB46）

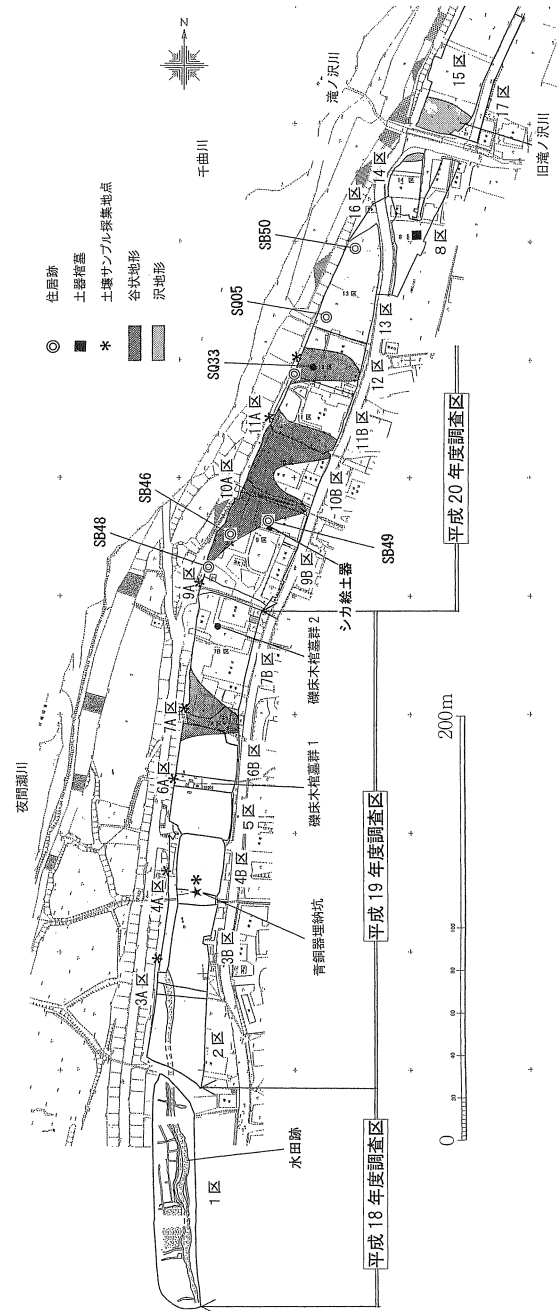


図5 弥生時代調査面全体図（約1：3,500）

9・12・13区には竪穴住居跡6軒が分布し、居住域が初めて確認された（図4）。時期不明1軒と後期1軒のほかは中期の栗林式期に属す。12区は谷状地形が大半を占めるが、栗林式の壺形土器を多量に埋めた長方形大型土坑1基がある。

15区南部の旧滝ノ沢川と思われる沢から北側に弥生時代の遺構・遺物は認められず、この沢が集落の北限となる可能性がある。

前年青銅器埋納坑が発見されたことから、弥生

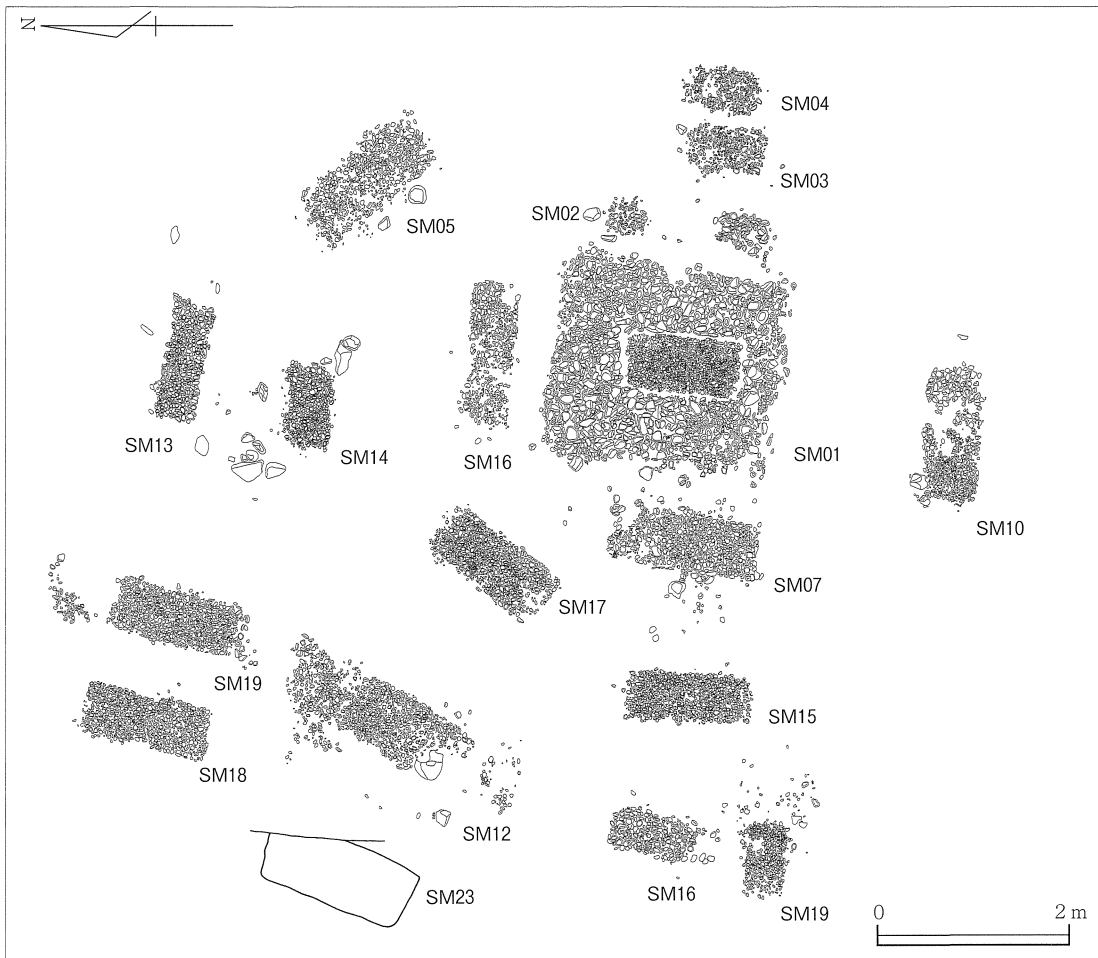


図6 6区礫床木棺墓群全体図（1：80）

時代調査面では全地区で金属探知機による埋蔵金属器の探索を行ったが、検出されなかった。

三重にめぐる礫床木棺墓群

6A区を墓域とする礫床木棺墓は18基検出された。分布範囲の南・北側に栗林式期の遺物を含む溝が埋没しており、わずかに高まった地形を墓域としている（口絵写真1・2、図6）。

青銅器埋納坑から約50m北に位置する。外形が正方形の大型墓SM01を中心に、その四辺と北東・北西側に、埋葬部の長さ1.5m、幅0.6m前後の墓が全体的に多角形をなして整然と並び、北辺・西辺では三重にめぐる。

SM01の埋葬部は南北に長軸をとり、長さ1.4m、幅0.7mの規模である。棺外側を人頭大円礫で礫床面から約20cmの高さまで埋めている。礫の範囲は南北2.5m以上、東西2.3mのほぼ正方形で

ある。埋葬部は礫床面下に深さ15cmほどの堀方があり、木口痕が認められた。埋葬部の北東から、緑色凝灰岩製に鉄石英製を交えた細形管玉が70点以上出土している（口絵写真3・4）。

SM01の周囲にある礫床木棺墓でも、堀方、木口痕が確認された（図7）。礫床が検出面に現れたものもあるが、本来は長方形土坑があったと推

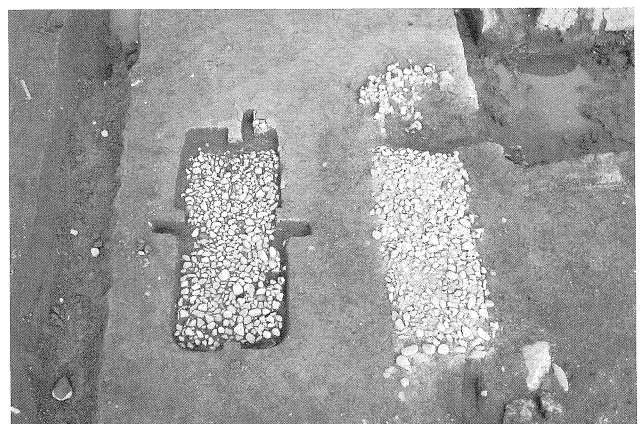


図7 普通規模の礫床木棺墓（SM18・09）



図8 4号銅鐸

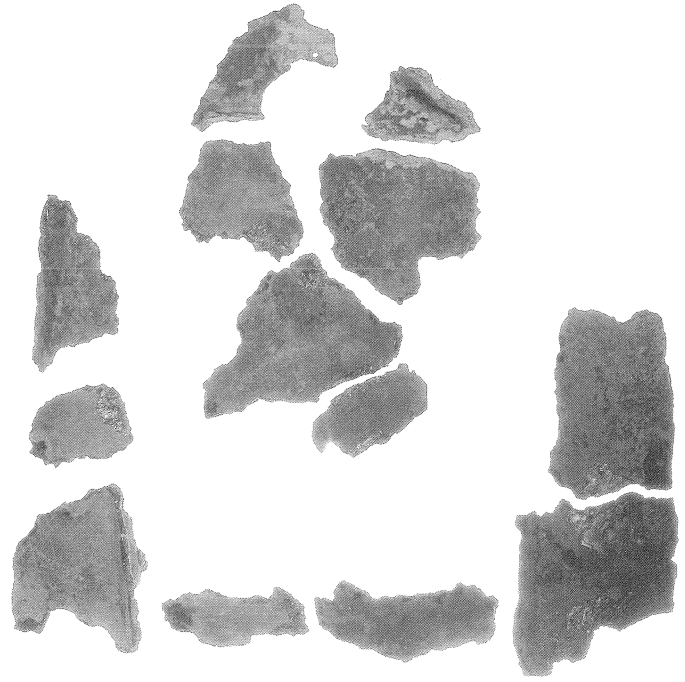


図9 5号銅鐸

定される。埋葬部の長さが1 m足らずの小型墓も見られる。これまで2基から細形管玉数個が出土している。ただし礫床木棺墓の調査中に掘削した土の水洗により、玉類は増加する可能性がある。

谷を隔てて約70m北に位置する7B区北部でも攪乱された礫床木棺墓2基がみつき、小規模な別の墓域が推測される。

礫床木棺墓に用いた礫には、砂岩、粘板岩、流紋岩、花崗岩、チャートなどが見られ、千曲川産の円礫を採取していることが明らかである。

5個体の銅鐸など

青銅器埋納坑が北側を重機で掘削され、銅鐸の下半部が欠損していたため、前年度から埋納坑付近の廃土を対象に金属探知機で青銅器を探索してきた。20年度は青銅器が含まれている可能性がある廃土約2,300㎡を探索した結果、銅鐸破片39点と銅戈破片1点を採取した。

これを個体識別したところ、埋納坑にあった銅鐸を含めて流水文銅鐸1個と袈裟襷文銅鐸4個の5個体を確認できた。型式は外縁付鈕1式が2個体、同2式が2個体、2式の可能性が高いものが1個体である。以下に柳沢遺跡調査指導委員の難波洋三・吉田広氏による銅鐸・銅戈観察所見を略

記する。

1号銅鐸（口絵写真6）：外縁付鈕1式、流水文。埋納坑出土の個体。表面は黒味を帯びて光沢あり。文様は不鮮明。鈕の菱環外斜面に綾杉文。流水文には端部を巻き込む古い特徴を持つ。鱗に外向鋸歯文。

2号銅鐸（口絵写真7）：外縁付鈕1式、四区袈裟襷文。表面は灰色がかり光沢あり。文様は不鮮明。身上部の型持孔は上区下位の中横帯に接する位置。身の下縁に蕨手文4対、鱗に渦巻文があるが、反対面は見られない。

3号銅鐸（口絵写真8）：外縁付鈕2式、袈裟襷文、摂津系か。身の中ほどに組紐文、下部には縦区画文と斜線文。鱗の飾耳は3箇所と推定される。下辺横帯は斜格子文。

4号銅鐸（図8）：外縁付鈕2式、袈裟襷文、摂津系か。身上部の破片では斜格子文の縦帯が横帯を切る。飾耳の線が太い。

5号銅鐸（図9）：外縁付鈕2式（扁平鈕式古段階の可能性も残る）、袈裟襷文。左下の裾部付近の破片には鑄かけと補刻が行われる。

5個体の銅鐸はいずれも高さ約20cmで、大きさに規格性がある。外縁付鈕1・2式銅鐸が製造された頃、近畿地方と接触があったと推定されるが、

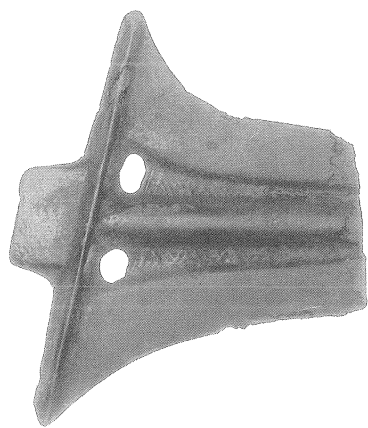


図10 8号銅戈

特に2式段階では摂津系と考えられる銅鐸が持ち込まれており、この系譜の集団から銅鐸を入手した可能性がある。外縁付鈕1・2式とも内面突帯の磨耗が著しいため、近畿地方と同様によく鳴らして使用したと考えられる。

埋納坑出土の1号銅鐸は3箇所 of 廃土地点間で接合し、2・3・5号銅鐸も1号と混じって異なる廃土地点間で接合した。この事実から、新たに採取された銅鐸は埋納坑に伴う可能性と、これに重複あるいは隣接する遺構に伴った可能性がある。

8号銅戈 (図10)：援の中途の欠損部は新しい。出土した銅戈の中で胡長は最も小さく、樋と穿の境界部にある斜格子文を省略し、界線から複合鋸齒文に移行する。桜ヶ丘銅戈と共通し、大阪湾型銅戈a類の中でも新しい様相と考えられる。

その他注目される遺物に、シカ絵線刻土器(口絵写真5)がある。壺形土器に2頭の雄シカを1本線で描く。県内で弥生時代のシカ絵は初見である。

高社山麓最大級の平安集落

6区から15区にかけて、平安時代の住居跡40軒が分布する。特に7・9・10区にはその4分の3が集中する。軸線はほぼ正方位に合い、カマドが確認できた住居はすべて南壁か南東隅に位置する。規模は大部分が3m級と、やや小形である。

遺物はカマド付近に集中して出土する住居が多い(図11)。坏・埴類は土師器が主体を占め、須恵器が少数、灰釉陶器はまれである。ほかに土製・石製の紡錘車がある。住居の時期は9世紀後半に集中している。

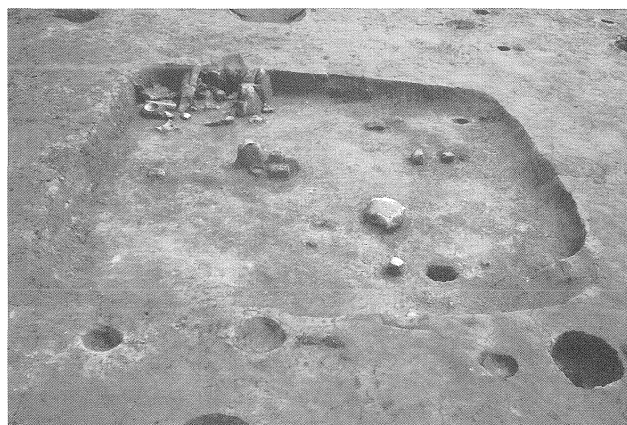


図11 平安時代の住居跡 (S B28)

成果と課題

弥生時代の集落構造の一端が把握されたことと、青銅器探索で複数個体の銅鐸の存在を確認したことは最大の成果である。青銅器埋納坑より南の低地は水田が展開する生産域、その北側は礫床木棺墓群が占める墓域、谷を隔てて土器等の廃棄域と小規模な墓域、9区以北は谷が入り組む扇状地に居住域を営む空間利用のありさまが把握された。これらのエリア相互の関連性と変遷の解明が課題となる。

礫床木棺墓は長野県に特徴的な在地の墓制といわれるが、大型墓を中心に二重・三重に墓がめぐる礫床木棺墓群の規格的な配置は例がない。家族墓の可能性も含めて、被葬者の構成解明が課題となる。SM01の管玉は弥生中期の1埋葬施設出土数では県内最多となる。墓の規模・構造からも集落あるいは地域最有力者の墓と推定され、青銅祭器とのかかわりに関心が集まる。

銅鐸は外縁付鈕1・2式、銅戈は大阪湾型a類の中でも新旧の様相が認められ、柳沢遺跡もしくは北信濃の弥生集団が長期にわたって西日本から青銅祭器を入手する環境を維持できたことが想定される。特に摂津系銅鐸が複数含まれることから、畿内の中でも製作地域を絞り込める手がかりをえた。

青銅器自体の考古学的研究とともに、鉛同位体比分析や鐸身内に詰まった土の土壌分析によって、より確実な個体識別と出土場所の特定をめざす必要がある。

たてがはなおもて (2) 立ヶ花表遺跡

(北陸新幹線施設建設関連)

所在地及び交通案内：中野市大字立ヶ花表

上信越自動車道中野ICから、立ヶ花橋方面に向かって最初の角を左折し、上信越自動車道沿いに約600m、長野方面へ戻った地点。

遺跡の立地環境：千曲川と篠井川が合流する高丘丘陵の南東向き斜面。

発掘期間等

調査期間	調査面積	調査担当者
20.6.23~10.31	1,600㎡	贅田 明 山崎まゆみ

検出遺構

遺構の種類	数	時期
窯跡	3	奈良

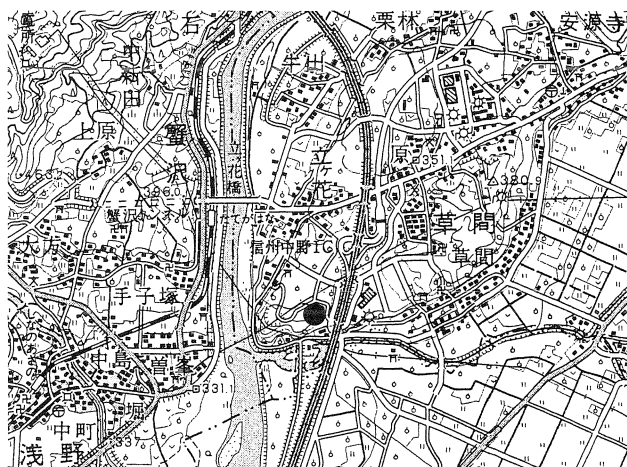


図12 立ヶ花表遺跡の位置 (1:50,000中野)

出土遺物

遺物の種類	時期・内容
土器	奈良(須恵器甕・坏・坏蓋、土師器の小破片)、弥生後期(壺・甕の小破片)
窯壁	奈良(管状痕跡などを残すものほか)
鉄製品	時期不明(鉄鏃)
石器	旧石器(剥片類)、縄文(石鏃)



図13 上空からみた立ヶ花表遺跡 (北東側から撮影)

大型甕を生産した半地下式の窯跡

今回の調査では、半地下式構造の窯跡（S Y）3基が検出された。残存状態が悪く、2基は燃焼部のみであったが、1基（S Y01）は燃焼部から焼成部の状態を明らかにすることができた。

S Y01は、北西－南東方向に長軸があり、焼成部は5.9m、燃焼部は5.1m、全長は11.0mを測る。幅は、焼成部・燃焼部ともに1.7～2.0mの範囲で、焼成部の奥壁付近が1.2mと若干狭くなる以外はほぼ一定幅を有する。

焼成部は、側壁から床面が著しく被熱し、奥壁では煙道へ続くと考えられる被熱した立ち上がりを確認された。床面は、貼床が施され、皿状の浅い窪みが2ヶ所で検出された。

燃焼部では、焚口付近に長軸が1 mを超える、土坑状の掘り込み2基が確認された。床面は、被熱するものの、貼床は明確でない。しかし、床下調査では、階段状の掘り込みが検出された。床面の下部である点から、製品の窯詰め時ではなく、窯の構築時に関わる何らかの施設であった可能性を指摘しておきたい。

焼成部と燃焼部では、床面の傾斜角度が異なり、燃焼部が急傾斜なのに対して、焼成部はかなり緩やかで、これがS Y01の大きな特徴といえる。

遺物は、焼成部の床面と覆土で出土したものが多し。器種は、ほとんどが甕で、接合作業を経たおらず不明確な点は残るが、8世紀後半の所産と思われる。器壁の厚さや頸部の直径などからみて、器高が1 mを超える大型の甕である。

焼成部床面の皿状の窪みは、大型の甕を置くための窪みで、床面の傾斜が緩やかなのは、大型の甕の転倒を防ぐための構造と推測される。さらに、焼成部出土遺物の主体が大型の甕である点から、S Y01は大型の甕を焼いた窯の可能性が高い。

高丘丘陵では、7世紀後葉から9世紀末葉の窯跡が、17遺跡で約50基確認されている。ここは「高井郡」の須恵器生産・供給の拠点であり、立ヶ花表遺跡もその1つであろう。また、粘土採掘坑や須恵器生産に携わる工人の集落など、関連遺構が窯の周辺部に存在することが予想され、候補地として、隣接する沢田鍋土遺跡があげられる。

沢田鍋土遺跡は、来年度の調査を予定しており、成果に注目していきたい。



図14 S Y01焼成部の遺物出土状況

かみごみょうじょうりすいでんし (3) 上五明条里水田址

(県道長野上田線力石バイパス関連)

所在地及び交通案内：坂城町上平字出浦

県道長野上田線を村上交差点から長野方面へ約500m向かった北西側

遺跡の立地環境：千曲川左岸の沖積地

発掘期間等

調査期間	調査面積	調査担当者
20.4.11～12.12	10,382㎡	西 香子 寺内貴美子 鈴木時夫

検出遺構 () 内は18～20年度の総数

遺構の種類	数	時期
竪穴住居跡	26 (55)	弥生後期 古墳 平安
掘立柱建物跡	5 (19)	平安
溝・流路跡	34 (55)	弥生後期～中世
土坑	376 (636)	古墳 平安
水田	1 (1)	平安

出土遺物

遺物の種類	時期・内容
土器・陶磁器	弥生後期(甕、壺) 古墳(埴輪、土師器甕・坏・埴、須恵器甕・坏)、平安(土師器甕・坏・羽釜、灰釉陶器坏、緑釉陶器皿)
金属製品	平安(銅鏡、鉄鐸、刀子、紡錘車)
石製品	古墳(白玉) 平安(砥石)
木製品	古代以降(曲物)

沖積低地での土地利用の変遷

上五明条里水田址では、昨年度調査した古墳時代や平安時代の集落跡の調査を継続して行い、加えて平成18年度のトレンチ調査で確認されていた、平安時代の水田跡の調査も行った。

今年度の調査地は、千曲市と坂城町の間を流れる六ヶ郷用水に沿った東西に長い(約600m)地区で、千曲川やその支流の氾濫などによって形成

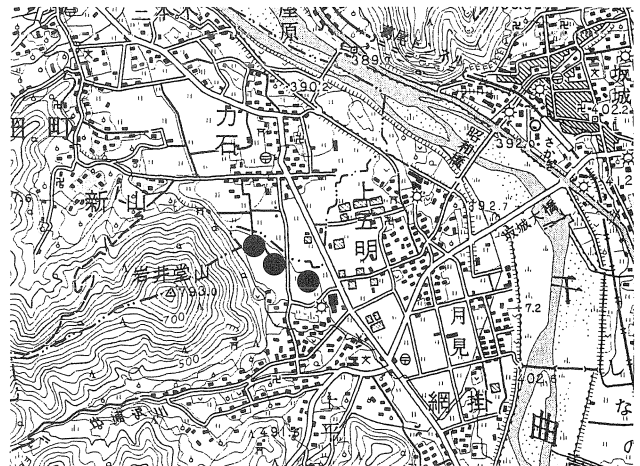


図15 上五明条里水田址の位置 (1:50,000坂城)

された微地形の変動に合わせて、土地利用を変化させていたことが分かってきた。以下、主な時代ごとにその特徴を記す。

古墳時代(6世紀頃) 今年度の調査では、竪穴住居跡4軒、溝跡9条などが東側の地区で検出された。住居跡は、昨年も東側の地区でのみ確認されており、集落の中心は微高地にあたる調査地東側に位置していたと思われる。なお、西側の地区からは、溝跡以外の遺構は検出されなかった。

遺物として注目されるのは、西側調査区を南北に横切る幅5m以上の流路跡から出土した、円筒埴輪や馬形埴輪の破片である。

遺跡周辺では、埴輪が伴う古墳は確認されておらず、未知の古墳が存在していた可能性も示唆される。

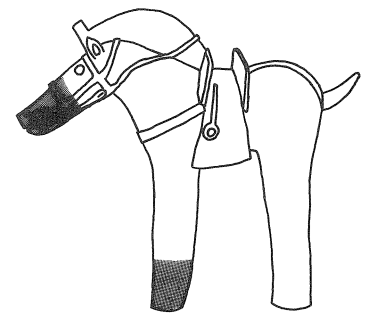


図16 今回出土した部位(■)



図17 流路跡から出土した馬形埴輪

平安時代（9世紀頃） 平安時代の水田跡は、今年度の調査区中央付近の低地で確認された。水田は、20～60cmの洪水砂に覆われていて保存状態も良好である。条里型地割に基づいて整備されたと考えられる南北方向の畦畔10条が確認された。水田面からの遺物は、平安時代とみられる土器片が少量のみで、時代を決定することは難しい。しかし、水田を覆う砂層の上層で10世紀末～11世紀初頭に属する集落跡が確認されていること、下層の古墳時代後期の遺構確認面から何層もの間層が確認されていること、厚い洪水砂層に覆われていることなどから、仁和4年（西暦888年）の大洪水によって埋没した水田である可能性が高い。

平安時代（10世紀末～11世紀初頭） 今年度は、竪穴住居跡21軒、掘立柱建物跡5棟などが検出された。平安時代の集落跡は、遺構の疎密は認められるものの、調査地全域で検出された。水田のあった低地部が洪水で埋没したことによって微高地が広がり、昨年度調査の予想よりもさらに西側まで集落域が広がっていることが確認された。

今年度の調査で注目されることは、昨年度、墓坑から出土した鉄鐸が、竪穴住居跡からも出土したことである。そして、この住居跡からは、銅製の鏡（八稜鏡）も出土している。

鉄鐸と銅鏡が同じ住居跡から出土したことは、この集落の性格を考える上で重要な資料となると思われる。この他、別の住居跡や土坑などから、鉄滓・羽口・炉壁などの鍛冶関係遺物が多数出土しており、鉄製品の製作が集落内で行われていた可能性も考えられる。

来年度は、県道に接する最も東側の地区の調査が予定されている。今まで調査されてきた古墳時代や平安時代の集落跡が、どこまで広がるかを確認することが調査の課題と考えている。

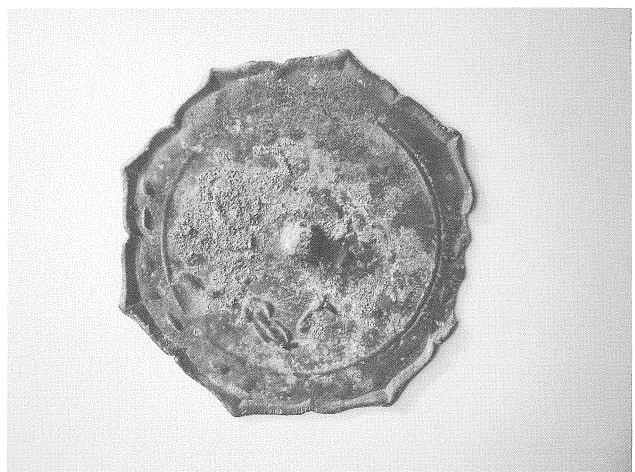


図18 住居跡から出土した八稜鏡



図19 平安時代の水田跡（人物が立っているところが当時の水田面）

(4) ちかついせきぐん 近津遺跡群

(中部横断自動車道関連)

所在地及び交通案内：佐久市長土呂

上信越自動車道佐久 I C の北西1.5km。国道141号西側の小諸市境。

遺跡の立地環境：浅間山麓に広がる火砕流台地上に立地し、湧玉川わくたまかわによる田切りに面する。

発掘期間等 () 内は H19・20 の総計

調査期間	調査面積	調査担当者
20.5.22～12.22	23,160㎡ (29,760㎡)	廣瀬昭弘 寺澤政俊 黒坂禎二 清水梨代

検出遺構 () 内は H19・20 の総計

遺構の種類	数	時期
竪穴住居跡	17 (23)	弥生末～古墳前期 平安
円形周溝墓	2 (2)	古墳
土坑	21 (29)	陥し穴3(6) 含む
溝跡	2 (3)	
焼土跡	2 (2)	

出土遺物

遺物の種類	時期・内容
土器・石器、鉄製品、人骨	縄文～平安土器、石器、鉄鏃・刀子・紡錘車など

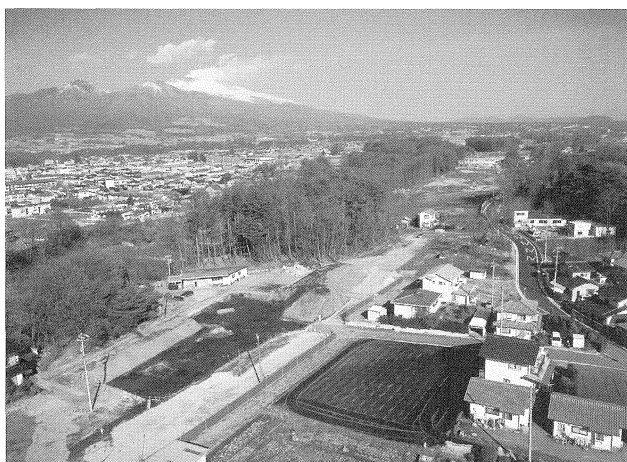


図21 近津遺跡群から浅間山を望む

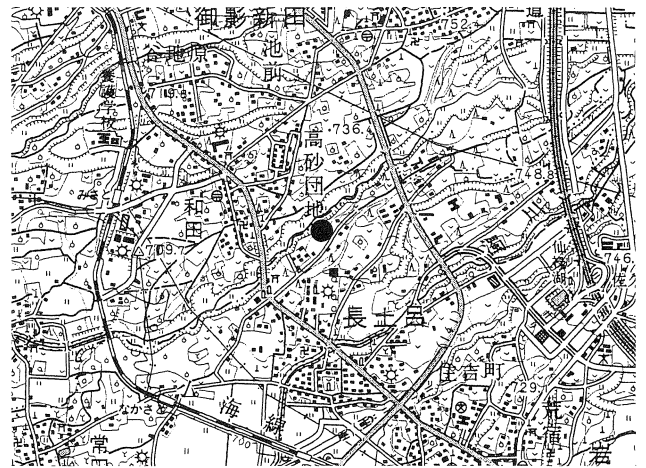


図20 近津遺跡群の位置 (1 : 50,000小諸)

田切りの縁に営まれた散村

佐久市北部から小諸市・御代田町にかけての浅間山裾野は10mを超す厚い軽石流堆積物に覆われ、河川浸食による田切り地形が発達している。近津遺跡群はこの軽石流堆積の末端付近にあたり、北側を湧玉川の田切り崖に、南側を浅い田切りの谷にはさまれた東西に細長い台地上に広がる遺跡である。調査は昨年度からの継続で、今年度は一部未買収地を除くほぼ全域が調査対象とされた(図23上)。

遺跡の現状は標高720～735mの比較的平坦面となっているが、遺構検出面では現地表面下に埋没した田切り状の谷により、2m程度の比高差を持った高位面と低位面からなる起伏に富んだ旧地形が明らかとなった。

昨年度からの調査により、近津遺跡群は弥生時代末から古墳時代前期、平安時代後期を主体とした小規模な集落跡であることが明らかとなってきた。湧玉川田切り崖に沿った起伏に富んだ地形環境を取り込みながら遺跡形成が行なわれたものと考えられる(図23下)。

弥生末から古墳前期の住居と墓

弥生時代末から古墳時代前期の遺構は、調査区域の中央部から西側にかけて存在する。12軒の住居跡が数軒程度のまとまりを持つようにも見受けられ、住居群の東端に2基の円形周溝墓などが構築される。

住居群は調査区域中央部の4区では高位面に、西側の6区では窪んだ低位面に構築されている。円形周溝墓は2基が近接して構築されている。土器の出土はないものの、1基の主体部から複数の鉄鏃が出土しており、該期の遺構と考えられる。また、周囲には壺や高坏を伴う土坑もあり墓域を形成する可能性がある。

平安時代はまさに散在的で、延長700m程の調査区域に6軒の住居跡が認められるのみである。

上記以外の時期としては縄文時代の陥し穴土坑3基が調査区域東側の2区の埋没谷の谷頭付近で検出された。昨年度分も合わせるとこの周囲で5基となる。

また、南側の田切りから北側の湧玉川の田切り崖まで直線的に台地を区切る溝が4区と8区に存在する。時期や性格は不明ながら、上面幅2～3m、底面幅1～2mの規模を持ち、何らかの区画を意識した溝といえる。



図22 住居跡と円形周溝墓

近津遺跡群の調査も8割弱が終了した。次年度以降に残された未調査部分は、高位面と低位面との地形変換点付近が中心となる。この調査により近津遺跡群全体の集落構造がより明らかにされるものと期待される。

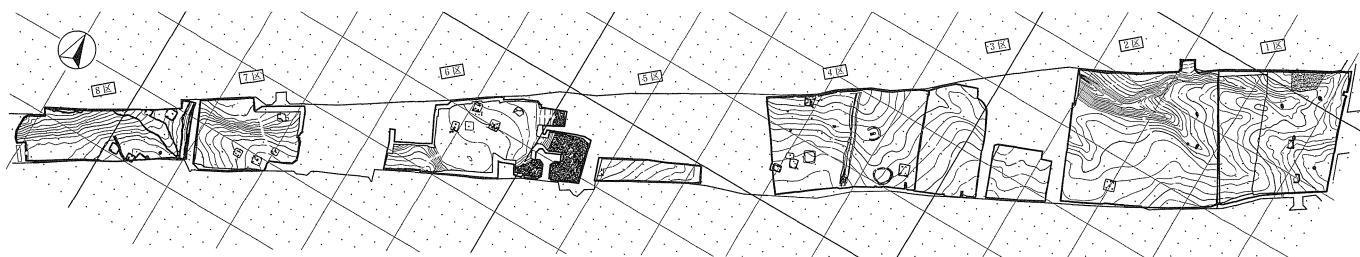
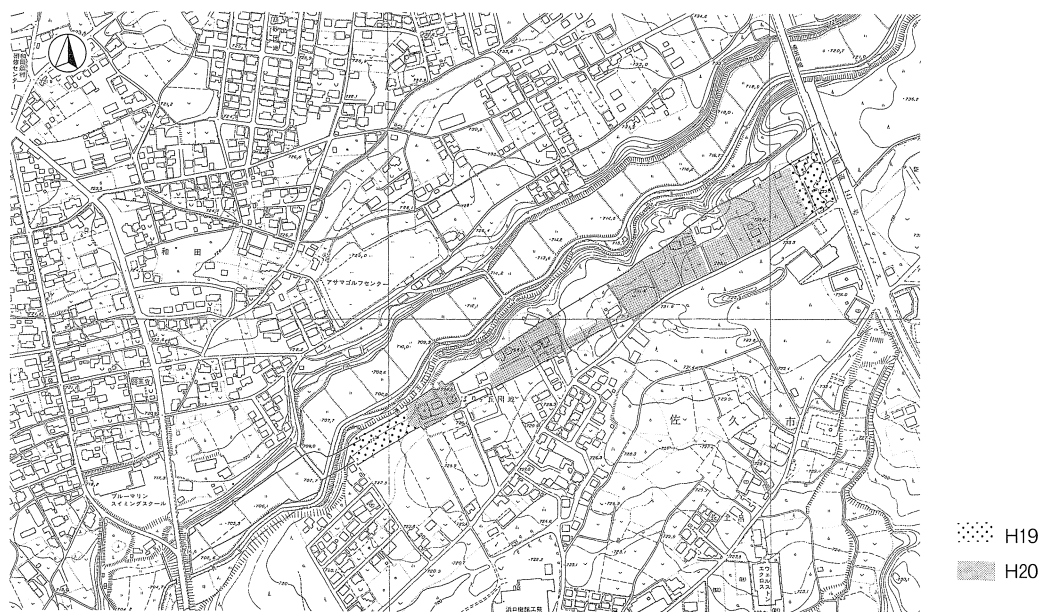


図23 近津遺跡群の調査範囲（上1：10,000）と遺跡全体図（下1：4,000）

(5) にしちかつ 西近津遺跡群

(中部横断自動車道関連)

所在地及び交通案内：佐久市長土呂字森下ほか

J R小海線の中佐都駅から市道近津中佐都線を近津神社方向（北東）へ約300m。市道の南側は周防畑遺跡群である。

遺跡の立地環境：浅間山麓に形成された田切り地形の末端近く、標高705～711mの台地上。北側は湧玉川に切れ、南側は濁川の氾濫低地に向かって緩やかに傾斜する。

発掘期間等

調査期間	調査面積	調査担当者
20.6.2～12.22	4,000㎡	柳澤亮、岡村秀雄、寺澤政俊、藤松慎一郎、上田真、川崎保、田中広明、黒坂禎二、古賀弘一

検出遺構 ()内は18～20年度の総数

遺構の種類	数	時期
竪穴住居跡	85 (605)	縄文中期、弥生後期～平安
掘立柱建物跡	13 (80)	縄文中期、弥生後期～平安
溝跡	9 (54)	弥生後期～鎌倉
土坑	983 (3,048)	縄文～平安
円形・方形周溝墓	1 (13)	弥生後期 (円1)、主体部削平
古墳	0 (2)	古墳前期、19年度
遺物集中	0 (4)	縄文、19年度
柱穴列	1 (2)	縄文～平安
石集中	0 (1)	古墳～平安、19年度

大規模な集落遺跡の調査終了

平成18(2006)年度から3年間続いた調査は今年度をもって全て終了した。調査した範囲は南北400m、23,950㎡に及ぶ。遺構は途切れることな

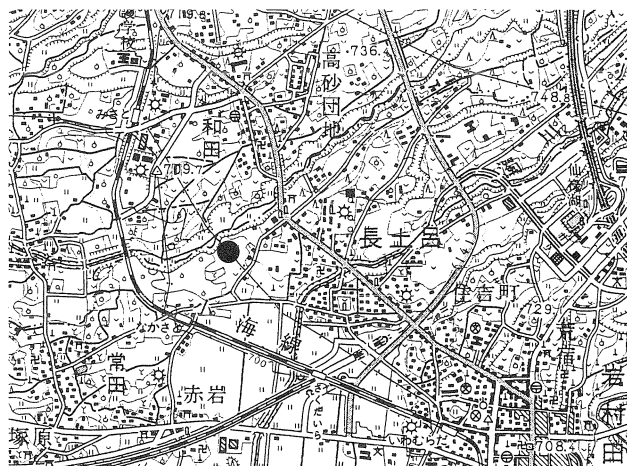


図24 西近津遺跡群の位置 (1:50,000小諸)

出土遺物

遺物の種類	時期・内容
土器・陶器	縄文中期～後期(深鉢)、弥生(鉢、高坏、壺、甕)、古墳(坏、坏蓋、高坏、甕、壺、甑、甗)、奈良・平安(円面硯、瓦片、坏、碗、甕、壺、甑)
土製品	鞆羽口
石器 石製品	縄文(石鏃、石匙、打製石斧)、古墳・奈良・平安(紡錘車、石製模造品、砥石、コモ編み石、搗き臼)
金属器	古墳・奈良・平安(銭貨、耳環、馬具、鉄鏃、鉄釘、紡錘車、鉄斧、鉄鉗、鉄滓ほか)、中世(銭貨)
骨・貝	奈良・平安・中世(ウマ・ウシ骨、鹿角)
炭化物	炭化材(竪穴住居跡内)

く重なり合い、竪穴住居跡605軒、掘立柱建物跡80棟、溝跡54条、土坑3,048基を数える。調査で出土した遺物も約1,400箱、重量にして約8トンと膨大で、その大半が当時使用されていた土器の破片である。

平成20(2008)年度の調査 今年度に調査した7区(4,000㎡)は、平成19(2007)年度調査済みの5・6区と8区をつなぐ部分である(図26)。調査前には宅地と畑地に利用されていた。また工事範囲内の市道部分も調査対象とした。ここでは前年のトレンチ調査による予想を上回る密度で遺構が重複し、新発見資料も多く出土した。以下、



図25 7区の調査状況と浅間山（南西方向から空撮）

時期別に調査の所見を記す。

縄文集落の発見 縄文時代では中期後葉の竪穴住居跡を2軒検出した。1軒は埋甕炉（S B 7067）、もう1軒は石組炉（S B 7076）を備えている。住居跡は隣接し、周囲に土坑も散見され、小規模な集落跡であることが想定される。佐久地域でも浅間山麓域から離れた平地部での集落発見は珍しい。

2つの弥生集落 8区でみつかった弥生時代後期の集落域を継続して調査した。その結果、

この集落は7区以南には広がらず、湧玉川の崖寄りでも小規模に展開することが明らかになった。超大型竪穴住居を構えて人工的な溝を配する、濁川に面した大規模な集落（1～4区、年報23・24参照）とは直線距離で140mほど間隔が空いている。こうした空間がどのような意味を持ち、個々の集落の領域はどのような範囲に及ぶのだろうか。

古墳時代の集落 古墳時代では、5世紀後半～6世紀初頭のカマドを持つ住居跡1軒（S B 7055）が7区で最も古い事例である。6～7世紀になると、竪穴住居跡は増大する。特に6世紀後半には壁の1辺の長さが8mを超え、深さも1m近い大型の住居跡が、間隔を空けながら遺跡全体に広く分布していることがわかった。そのうち、7区でみつかった2軒（S B 7014, 8024）はいずれもカマドを北壁中央部分から東壁南寄りに作り変えていること、床面に間仕切り状の溝が数条見つかることなど共通点が多い。

大型の掘立柱建物 古墳時代後期の集落に伴う可能性が高い、大規模の掘立柱建物跡もみつかった

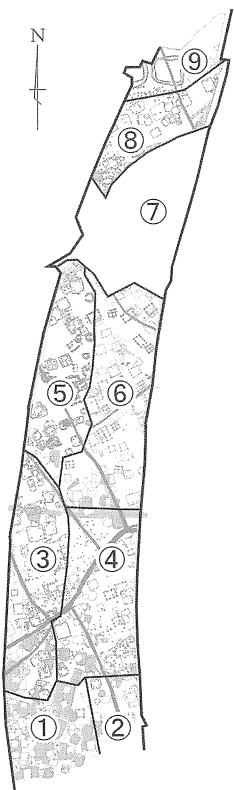


図26 調査地区（1：4,000）

(S T8006)。その構造をみると、主軸は北から西に37°傾き、5間×2間、縦13.20×横5.16mを測る。中軸線上には束柱と想定できる柱穴が並び、床面積の広い高床構造と考えられる。(図27)

同規模の建物跡は5区にもみついている(S T5007)。こちらは主軸が北西13°、5間×2間、縦13.50×横5.40mを測る。両者は100m離れている。これからの分析で、縄文・弥生時代から伝統的に続く竪穴住居主体の集落とは異なり、こうした大型建物を中心にすえた集落へと変容していく様子がみえてくるだろう。

集落を区切る流路跡 奈良時代には、すでに埋没している弥生・古墳時代の住居跡を壊すように、7区を横断する大きな流路跡が見つかった(S D8006、図29)。地区内では長さ120m、幅2～3m、深さ1mを測る。その方向は自然開析の田切り地形と一致するが、人為的な掘削あるいは修繕行為のあったことも考えられる。埋没過程は大きく3段階に分けられ、最終的には平安時代に埋没する。流路跡からは「大井」と刻書された須恵器壺(図28)や、中空円面硯など希少な遺物も出土している。

「大井」と書かれた土器 流路跡の1点を含め、7区だけで「大井」と書かれた土器が7点出土している。他の地区では今のところ出土していない。文字は刻書3点と墨書4点に分かれる(刻書:須恵器壺1、壺1、土師器坏1、墨書:土師器坏4)。いずれも奈良時代から平安時代前半の所産である。



図27 大型の掘立柱建物跡(北方向より撮影)

出土遺構からの検討ができていない段階であるが、いまだ所在のはっきりしない「佐久郡大井郷」に迫ることができる資料といえよう。

灰釉陶器の埋納土坑 平安時代では、7区北西側から灰釉陶器のみ17点を一括埋納した土坑1基が見つかった(S K7782)(図31)。土坑は円形で直径0.6m、深さ0.6mときわめて小さい。陶器はすべて土坑下半部に破碎した状態で重積し、その上から、土を被せて埋められている。

灰釉陶器の内訳は、碗の大型品(口径の平均15.5cm)6点、小型品(13.6cm)4点、皿の大型品(14.2cm)3点、中型品(13.4cm)3点、小型品(12.5cm)1点である。そのうち皿の中型品2点は器形、胎土、施釉方法、焼成状況が酷似してい



図28 底面に「大井」と刻まれた壺

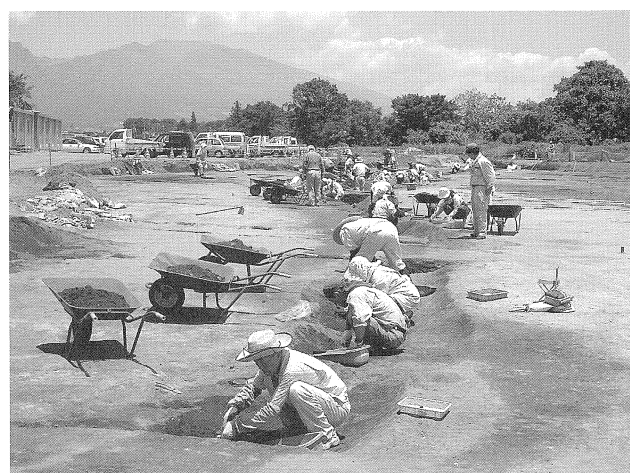


図29 集落を横断する流路跡



図30 土坑から出土した灰釉陶器

て、どちらの底部外面にも「苗」と1文字墨書されている（図30中央手前の2点）。この土坑の周囲では、8区および西側市道部分（佐久市教委調査）から土壙墓が数基確認されている。また同時期に隣接していた可能性のある掘立柱建物跡もみつかっている。そうした遺構に関連した何らかの儀礼行為の痕跡と考えている。

このほか、7区東側の大型土坑（SK7719）から馬の骨がみついている。調査区境のため、前後の肢骨部分だけの調査であるが、成馬1頭を埋葬した状態と予想される。時期は検出状況から奈良時代以降としかいえず、今後検討が必要である。こうした馬を埋葬した土坑は、18年度に2区から見つかっていて、今回で2例目の発見である。

古代末～中世前半（平安～鎌倉時代）になると、集落はなくなり、ほかの地区と同じように土地を区画するような溝跡が縦横に張り巡らされる。この溝の埋没以後、遺構や遺物は存在しない。

集落の性格と領域 今回、縄文時代から中世まで、数千年にわたる集落を長大な範囲で調査する



図31 灰釉陶器の出土状況

機会を得た。調査終了時点の段階でも、集落の立地、範囲、遺構配置などが時期ごとに変化していく様子がおぼろげながらみえてくる。これから調査記録と出土遺物の整理や分類を進めることにより、各時代における集落の性格や領域をより具体的に捉えることができるだろう。

(6) たじまつか みずぼりつか 田島塚・水堀塚

(中部横断自動車道関連)

所在地及び交通案内：佐久市北川・中小田切

国道141号線下小田切の交差点南約1km

遺跡の立地環境：千曲川左岸、八ヶ岳山麓から張り出した丘陵の尾根上に立地

発掘期間等

調査期間	調査面積	調査担当者
20.6.2~10.2	田島500㎡ 水堀500㎡	櫻井秀雄 内堀 団

検出遺構

遺構の種類	数	時期
塚（田島塚）	1	古代以降
塚（水堀塚）	1	古代以降

出土遺物

遺物の種類	時期・内容
土器・陶磁器	古代～近世（田島・水堀）
石器	石鏃（田島・水堀）・石鉢（田島）
鉄製品	鏃（田島）・釘（水堀）
青銅製品	銭貨（田島・水堀）

千曲川左岸の丘陵尾根上につくられた 古代以降の2つの塚

千曲川左岸地域には南の八ヶ岳から張り出した丘陵が幾重にもみられる。田島塚はそうした丘陵の尾根先端に、また水堀塚は同じ尾根上で約200m南方に立地する。この2遺跡の位置する丘陵は、永禄2年（1559）開創の曹洞宗寺院である泉龍院の裏山にあたる。

田島古墳と命名されていた高まりは、昨年度に清掃と現況地形の測量を行ない、立地や形状等から竪穴系の埋葬施設をもつ方墳の可能性が高いと

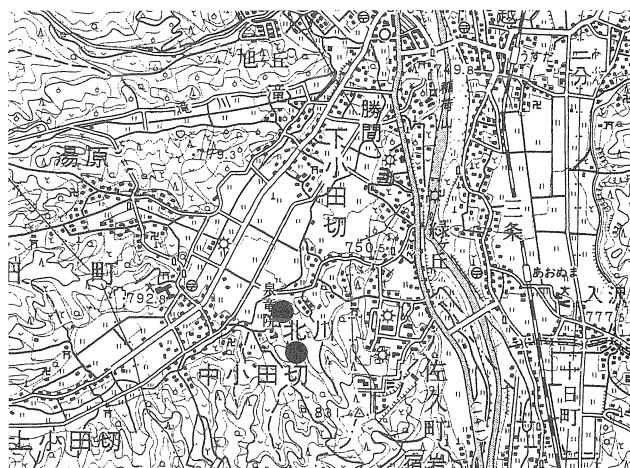


図32 田島・水堀塚の位置（1：50,000小諸）

考えられた。水堀古墳とされた高まりについても、同様な特徴がみられることから、ともに古墳時代前・中期の古墳として本格調査に臨むこととした。田島塚 盛土のトレンチ調査に入った時点で、奈良時代後半以降の土器や石鉢等が出土した。また、埋葬施設もみられないことから、古墳ではなく、古代以降に構築された塚であることが判明し、名称も田島塚へ変更手続きをおこなった。

規模・形状は径12m程の円形を呈する。盛土は2層にわかれ、上層では幕末の文久永宝等が出土し、下層では縄文時代の石器および奈良時代後半以降の遺物（土器・鉄鏃等）が認められた。近世以降の遺物は下層ではみられないため、奈良時代後半以降に構築された塚に、近世末～近代頃、再び盛り土を施したものと考えられる。なお、塚構築以前の縄文時代及び奈良時代以降の遺構は認められなかった。

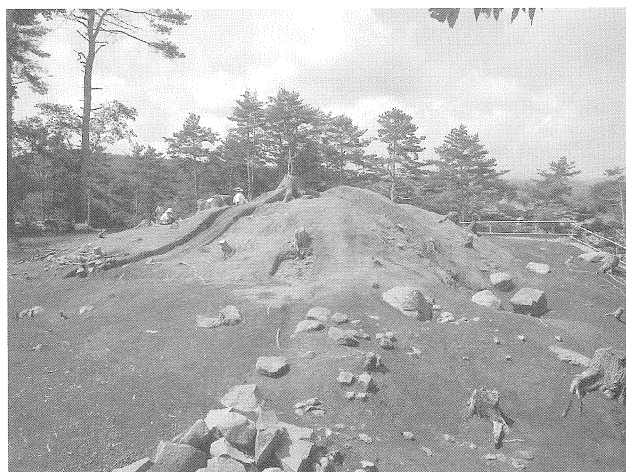


図33 田島塚



図34 ハヶ岳山麓から張り出す丘陵の尾根上に立地する2つの塚（左：田島塚、右：水堀塚）

水堀塚 墳丘盛土内から古代以降の土器や銭貨（1068年初鑄の熙寧通宝・1078年初鑄の元豊通宝他）・鉄釘等が出土し、埋葬施設もみられないことから、古代以降に構築された塚であることが判明した。そのため、水堀古墳についても水堀塚へ

名称変更の手続きを行った。規模・形状は削平された部分もあるが径18m程の方形を呈する。

田島塚・水堀塚ともに内部施設は確認されておらず、これらの塚の性格についての究明は今後の課題である。



図35 水堀塚



図36 水堀塚 盛土掘り下げ風景

こやまてらくぼ (7) 小山寺窪遺跡

(中部横断自動車道関連)

所在地及び交通案内：佐久穂町高野町2064-1ほか。

国道141号線千曲病院入口を西へ800m。

遺跡の立地環境：八ヶ岳東麓、千曲川支流北沢川
右岸段丘上の小丘陵の裾野にひろがる

発掘期間等

調査期間	調査面積	調査担当者
20.9.16～12.17	4,200㎡	川崎保・古賀弘一・内堀団

検出遺構

遺構の種類	数	時期
竪穴建物・住居跡	3	古代 中世
掘立柱建物跡	1	古代～中世
土坑	約700	縄文・古代～中世(柱穴群、柵列、井戸跡を含む)
畦・溝跡	3・5	中・近世(水田跡に伴う)

出土遺物

遺物の種類	時期・内容
土器・石器・陶磁器	縄文～古代土器、石器、中・近世陶磁器

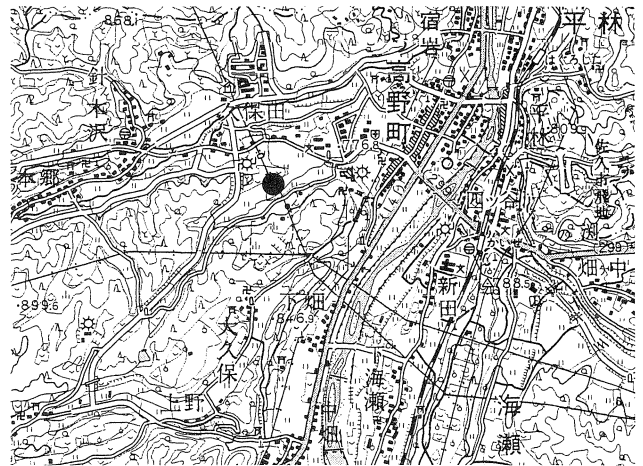


図37 小山寺窪遺跡の位置 (1 : 50,000 蓼科山)

千曲川上流の古代・中世の集落と水田跡

千曲川左岸の八ヶ岳東麓の台地は、火山性堆積物に広く覆われているが、千曲川の支流により、東西に浸食されている。遺跡はこの台地上にある(図37)。遺跡周辺には「津金寺」があったという伝承があり、町教委の調査で中世五輪塔群が出土している。今回の調査区は、同一台地の南側斜面を町教委調査地点の東へ200mほど下った地点にあたる。

調査の結果、縄文時代の土坑や遺物も検出されたが、遺構遺物の中心は、古代(平安時代中葉)～中世である。南向きの緩斜面に竪穴建物跡や掘立柱建物跡が散在し、杭列や柵跡と思われる小土坑群を伴う集落跡が見つかった。また、低地部では、集落跡と同じ検出面上で水田跡が検出された。

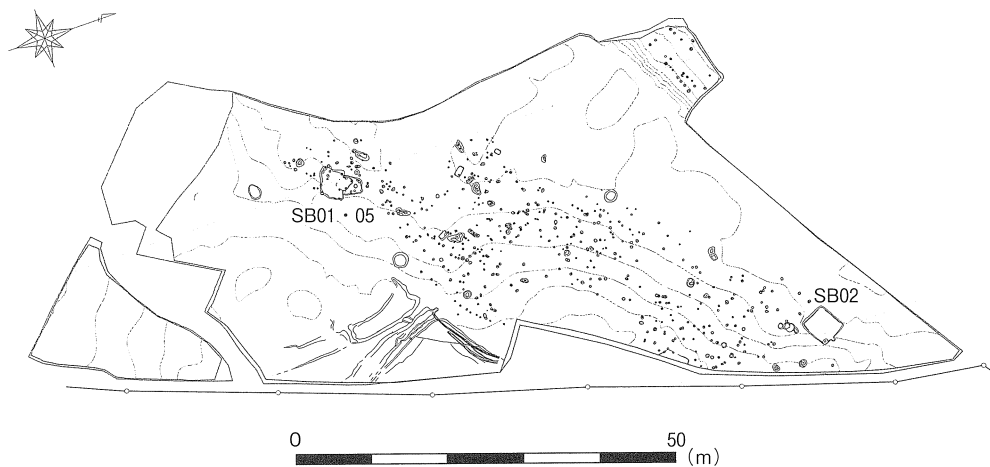


図38 小山寺窪遺跡の調査範囲 (1/1,000)

平安時代の竪穴住居跡S B02は、埋め戻したと考えられる土の上に、火を焚いた痕跡があり、そこから土師器坏が多く出土した(図39)。隣接する土坑4基でも、土師器坏が多く、覆土には炭化物や焼土粒が含まれていた(図40)。土師器坏には内面黒色処理の施された例が多いことから、住居廃絶後の窪地などを利用して、土師器坏の内面黒色処理をした可能性が考えられる。

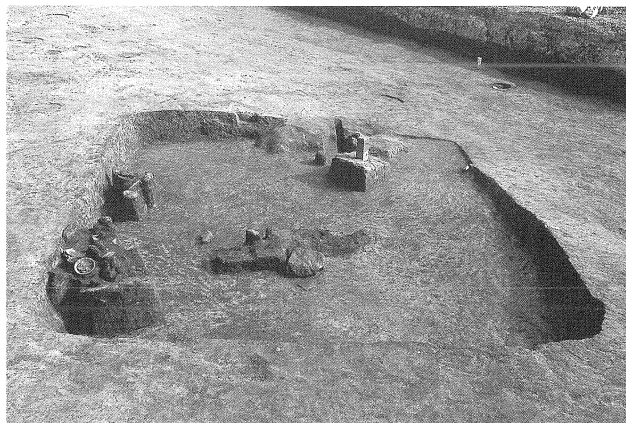


図39 カマドのある平安時代の住居跡

水田跡は2面あった。上層水田は、北と東に伸びた畦でL字状に画され、水田面は洪水砂で被覆されており、足跡もみられた。また、畦と並行した溝跡が2条みつかった。うち、幅の狭い溝S D02に接して、畔に水口と考えられる箇所がある。溝跡は水田跡に伴う施設と考えられる。水田土壌から中・近世陶磁器が出土しており、洪水砂の堆積は、寛保2(1742)年の大洪水「戌の満水」の可能性がある(図41)。またその下層には別の畦や溝跡が検出され、異なる時期の水田跡(中世か)が存在した可能性が高い。



図40 S K 569遺物出土状況

今回の調査地点では、古代・中世の集落跡が確認された。来年度は、集落の実態や古代中世寺院との関係解明が期待される。



図41 上層水田跡

しもむら
(8) 下村遺跡
 うぐいすがじょうせき
(鶯ヶ城跡)

(飯喬道路関連)

所在地及び交通案内：飯田市千栄

名勝天竜峡から東側に約3km

遺跡の立地環境：天竜川左岸の河岸段丘上

発掘期間等

調査期間	調査面積	調査担当者
20.6.30～12.9	7,607㎡	河西克造 曳地隆元

検出遺構

遺構の種類	数	時期
曲輪跡	3箇所	中世(16世紀)
堀跡	2条	中世(16世紀)以降
溝跡	1条	中世(推定)
土坑	3基	中世
集石	1基	中世以前
道路跡(推定城内道)	1条	中世

下村遺跡と鶯ヶ城跡の遺跡範囲は重複しており、中世城郭関連を鶯ヶ城跡、古代以前が下村遺跡と峻別されている。



図43 鶯ヶ城跡の遠景(天竜川対岸の天竜峡ICより)



図42 下村遺跡(鶯ヶ城跡)の位置(1:50,000時又)

出土遺物

遺物の種類	時期・内容
土器・陶磁器	中世(瀬戸美濃の丸皿・天目茶碗・すり鉢、内耳土器)、近世幕末(瀬戸美濃の土瓶)
金属器	中世(銭貨:洪武通宝・永楽通宝、鉄製品)、中世以降(刀の縁金具)
そのほか	近世(硯)、中世(骨)

天竜川を望む戦国時代の山城

鶯ヶ城跡は、武田信玄侵入前に天竜川以東を支配した知久氏の本城である神之峯城(飯田市上久堅)の出城として機能し、神之峯城が武田信玄の攻撃で天文23年(1554年)に落城した際に、廃城となったと伝承されている城である。

1982年、県教委による中世城館跡分布調査では、北沢川の浸食で削り残された尾根状地形の頂部で鶯ヶ城跡の中心部(主郭)が確認された。飯喬道路建設工事により東側斜面を除き、主郭が位置する尾根の大半が削平されることとなった。調査前の地表面観察では、尾根の頂部で土塁状の高まり、西側斜面で階段状に並ぶ平場と堀状の凹みが確認されたため、尾根全体を調査対象とした。

今年度の調査は、尾根の西側斜面と裾部を対象に実施した。その結果、西側斜面では、尾根頂部に近い場所にある平場が曲輪と認識された。曲輪は、最初に斜面を削って崖(切岸)を造作し、その発生土で構築されていた。また、道路跡と斜面上方から下方にのびる堀が確認された。道路跡は幅約2mで、尾根頂部付近の曲輪から等高線に



図44 鷺ヶ城跡の調査風景

沿って尾根先端部（来年度調査区）にのびる。来年度の調査では、この道路跡が鷺ヶ城跡の城内道と判断できるか否かが明らかになると思われる。一方、堀は主郭付近と尾根先端部の2箇所を確認され、後者の堀は断面がV字形で、幅約4m、深さ約1.5mを測る大規模なものである。

遺物では、曲輪と推定城内道の構築土から内耳土器と瀬戸美濃（大窯）製品の丸皿、堀の底部付近からも瀬戸美濃（大窯）製品の丸皿が出土した。すべて16世紀の所産である。

一方、鷺ヶ城跡の裾部では、城の南側を流れる北沢川の旧河道跡が確認された。土壌の観察から、少なくとも近世以降は水田として利用されていた。

今回の調査では、鷺ヶ城跡に関して、曲輪の造成や堀の掘削などの大規模な「普請」が、16世紀に行われていたことが明らかとなった。城の中心部（主郭部）は来年度に調査を予定している。2ヵ年にわたる全面発掘で、鷺ヶ城跡の城郭構造と存続時期が明らかになると考えられる。

なお、下村遺跡（古代以前）に関しては、遺構・遺物ともに検出されなかった。



図45 尾根頂部の切岸と曲輪



図46 斜面を縦断する堀を登る発掘補助員

Ⅲ 本格整理作業遺跡一覧

遺跡名	所在地	事業名	整理の内容（作業）	整理中の主な成果
せんた田	中野市	千曲川替佐築堤	黒曜石産地同定委託	原産地は星ヶ台に集中する傾向あり。
みやおき宮沖			注記委託	－
にしよつや西四ツ屋	飯綱町	(主)長野荒瀬原線 (四ツ屋バイパス)	遺物実測、遺物写真撮影、図版作成、原稿執筆ほか、報告書刊行	本文参照
おもてまち表町				
しゃぐうじ社宮司	千曲市	一般国道18号 坂城更埴バイパス	六角木幢保存処理委託	－
みねうたいざか峯語坂			全体図・遺構図作成、遺物実測	－
ひがしなかぞね東中曾根			全体図・遺構図作成、遺物接合、復元	－
にしなかぞね西中曾根				－
ひがしじょう條			本文参照	本文参照
なかほら中原	小諸市	上信越自動車道 佐久ジャンクション	遺物実測、遺物写真撮影、図版作成、原稿執筆ほか、報告書刊行	本文参照
のびつけ野火附				
のびつけじょうせき野火附城跡				
にしちかつ西近津ほか	佐久市	中部横断自動車道	諸記録類のチェック、遺物水洗・注記 遺物接合、炭化材ほか 自然科学分析、黒曜石産地同定委託	森平遺跡では、弥生時代中期の建築材にコナラ節の割合が高く、C ¹⁴ 年代測定による年代値は紀元前2世紀～紀元前後1世紀に収まる例が多かった。黒曜石原産地は諏訪市星ヶ台が47%であったが、縄文時代に比べその割合は低い傾向が認められた。
みしゃぐうじ御社宮司	茅野市	一般国道20号 坂室バイパス	図版作成、原稿執筆、報告書刊行	約30年前の中央道調査で発見された中世集落と畦畔状遺構の性格が解明された（御社宮司遺跡）。 包含層出土の縄文時代晩期土器が末葉に限定される資料であることが判明した（中村・外垣外）。
なかむらそとがいと中村・外垣外				
たけさなかほら竹佐中原	飯田市	一般国道474号 飯喬道路	原稿執筆・報告書編集	C地点では27例の接合資料を確認。最大のものは58点が接合し、21.2cm×19.4cm×17.1cmに復元され、母岩は1辺30～40cmを超える大形の礫であることが判明。C地点ブロック内に、微細遺物の分布等から4箇所作業エリアを想定した。
しろやま白山			古代の住居跡（8世紀後半～9世紀初頭）は、遺構としては飯田市山本・竹佐地域で初の検出例。	
やまとおつか山本大塚			遺構空白域 豊富な副葬品をもつ近世前半期の墓壇。六道銭の扱い方を含めた副葬品の在り方など、当時の葬送儀礼の一端が明らかになった。	
てらさわ寺沢			遺構空白域	
なみまつ並松			遺構空白域	
もりばやし森林			建物内での石鏝製作が想定される縄文中期の小形住居跡。大形住居をもつ弥生後期の集落。	
さがりまつ下り松			縄文中期中葉から後葉の小規模集落。土器の分析から、一時期1～2軒の住居に土坑群が伴う集落形態が、複数時期にわたり継続することが判明。	
たいこぼろ太鼓洞			遺構空白域	
よこやま横山			遺構空白域	
くめじょうせき久米ヶ城跡			遺構空白域	
くめおはた久米大畑			遺構空白域	
くめうだ久米上田			遺構空白域	
くめうえのたいら久米上ノ平			遺構空白域	
くめうえのたいらみなみ久米上ノ平南			遺構空白域	
ほんほら本洞			遺構空白域	
かわじだいましょうじんぼら川路大明神原			遺物実測、図版作成、原稿執筆、報告書編集	土器の分析から、縄文中期の集落は、初頭～中葉前半の第1期、断絶期を挟み、後葉前半の第2期に大きく分かれることが判明。第1期集落は散在的な居住形態、第2期集落は住居数が増加し、一定範囲への集中的な居住形態に変化することが捉えられた。

(1) 表町遺跡・西四ツ屋遺跡

(県道長野荒瀬原線 四ツ屋バイパス関連)

両遺跡は、上水内郡飯綱町牟礼に所在する。平成16～19年に発掘調査を行い、今年度は、報告書刊行に向けた整理作業を行った。

伝承どおりの戦国時代集落発見 表町遺跡では、今から約500年前、戦国時代の掘立柱建物跡25棟、井戸跡27基、その他土坑多数がみつき、この地に大きな集落が存在したことが判明した。「表町」の地名は、遺跡のすぐ北側に隣接する中世矢筒城に関係しており、「昔、城の表（南）に大きな集落があった。」という伝承が残っていた。現在一面に広がる農地の下には、言い伝えどおりの集落が眠っていた。

集落内の井戸跡からは、鋏・臼・そりなど様々な木製品がみつかった。空気に触れないことで500年間残っていたものである。整理作業の中で樹種を調べたところ、鋏はサクラ、臼はカバノキ属、そりはアカマツの木が使われていることがわかった。いずれも地元でよくみられる樹種である。鋏などの農具にはカシヤクヌギなどがよく使われ、サクラが使われることはめずらしい。地域と関連

した樹種選択・樹種利用がなされていた様である。列をなす縄文時代の陥し穴 表町遺跡からは、133基の縄文時代の陥し穴もみつっている。個々の陥し穴を分析した結果、細長い溝状のタイプと円形・楕円形のタイプの2つに分類された。

陥し穴の時期は、遺構から採取された炭化物による科学的年代測定結果を参考に、溝状タイプが縄文時代後期（3,000年前頃）、円形・楕円形タイプが縄文時代前期（6,000年前頃）と推定される。

これらの陥し穴は、列をなして並んでつくられている。これは、並んだ陥し穴の間をふさぎ、獲物を穴の上へ追い込む方法がとられたためと思われる。確認された陥し穴の列は、24列にも及んだ。

溝状の陥し穴には、長さ4 m、深さ1.3mの規模をもつものもあり、一つの穴を掘るだけでもかなりの労力が必要であったと思われる。縄文人の生活のための苦労を物語るものである。

他にも、西四ツ屋・表町両遺跡から、平安時代前期（1,100年前頃）の竪穴住居跡や掘立柱建物跡もみつっている。今まで調査歴がなく、空白となっていた地域の歴史に、新たな資料ともたらず結果となる調査であった。



図47 戦国時代井戸跡から出土した約500年前の鋏

(2) 東條遺跡

(一般国道18号坂城更埴バイパス関連)

坂城更埴バイパス関連では標記遺跡と、峯謡坂遺跡、西中曽根遺跡、東中曽根遺跡について、報告書作成のための整理作業を開始した。主な作業内容は4遺跡とも、全体図・遺構トレース、遺物の分類・接合・選別・復元・実測・計測等である。また、平成16(2004)年度から奈良文化財研究所に委託している社宮司遺跡「六角木幢」保存修復が完了した。ここでは東條遺跡について紹介する。

木製品の整理 東條遺跡では、平成14(2002)年度から19(2007)年度にわたる発掘調査で、鎌倉・室町時代の木製品が多数出土した。今年度はまず、全容把握を主眼に整理を進め、形状や加工の有無による分別の上、製品として認識できるものとそうでないものに分けた。結果、製品には、漆器・櫛・さじ・下駄・絵馬状木製品・曲物・祭祀具(刀形・陽物・琴柱)・杓子・樹皮製品・栓・鞘(さや)・塔婆・柄・編物・木簡・木釘・建築部材・井戸枠など、多種類認められることが判った。このほか、用途不明の木製品やその残材、残屑などを加えて、木製品総数は9,500点におよぶ。その中から、曲物と櫛、建築端材を取り上げることにする。

なお、木製品の分類・評価にあたっては、首都大学東京の山田昌久教授のご指導を得た。

多様に利用した曲物 中世の井戸や包含層から直径10~20cmの円形曲物の底板(または蓋板)が、破片を含めおよそ80点出土した。また、底板を抜

いた大形の曲物を水溜として埋設している鎌倉~室町時代の井戸が2基検出されている。さらに、柄杓や折敷、底板を再利用した絵馬状木製品や刀形の祭祀具、側板材の利用とも考えられる木簡なども確認された。今後、剥ぎとった薄い板材や端材などを検討し、集落内で曲物が製作されたか、あるいは再加工の工程等について明らかにしたい。

同一樹種の用材が使われている櫛 14世紀代の井戸と包含層から櫛6点が出土した。すべて幅広の長方形をした横櫛で、歯が密に詰っている櫛と間隔の広い櫛がある。用材の樹種はすべてイスノキである。東海地方以西の四国・九州・沖縄の暖かい地域に生育する常緑高木であることから、他地域からの流通品として持ち込まれたものと考えられる。

建築材を切断した残材ほか 木製品の多くが製品として判断できない、端材や木片である。これらは中世の包含層から出土したものである。中には建築材を加工する際、不要として切り取られた部分と考えられるものもみられた。詳細は整理中であるが、数量や加工痕、出土状況の分析を通して、今後、構造物の内容や建築技法などの検討を進めてゆきたい。

陶磁器・石器 東條遺跡では、木製品以外にカワラケ、青磁・白磁の輸入磁器、古瀬戸や常滑などの国産陶磁器の破片が約1万点出土した。主な時期は13~14世紀頃と15~16世紀頃である。また、硯などの石製品もあり、木製品とともに該期における地域史を知る好資料になると考えられる。



図48 東條遺跡の木製品(残材)



図49 東條遺跡の硯

(3) 中原遺跡群・野火附遺跡・野火附城跡

(上信越自動車道佐久ジャンクション建設関連)

平成14～16(2002～2004)年度に発掘調査を行い、今年度は、報告書刊行に向けた整理作業を行った。

中原遺跡群 濁川北岸の台地上に位置する。今回の調査は、上信越自動車の東側2,400㎡で、古墳時代後期～奈良時代の竪穴住居跡など10軒が検出された。しかし、中部横断自動車道が上信越自動車道にすりつく部分であったため、幅1～15mと狭長な調査区となり、遺構の全容を検出できた例は少なかった。一方、上信越自動車道調査時に部分的にしか調査できていなかった住居跡では、前回の所見に補正を加えることができた。

遺物の整理作業では、口径20cmを超える須恵器蓋が多出していることが判明した。大小の器の使い分けは、都の食器様式がいち早く及んだ地方官衙を経て、さらに周辺に波及したと考えられる。このことから、本遺跡の近辺に官衙があったことが示唆され、注目される。

野火附遺跡 中原遺跡群の乗る台地との間に谷を挟んだ北側の台地上に位置する。上信越自動車道建設時の調査区の両側、16,000㎡の調査を行った。古墳時代前期末の竪穴住居跡2軒と、同後～終末期の竪穴住居跡34軒、大部分時期不明だが、一部が古墳時代終末期の掘立柱建物跡13棟、奈良時代の溝1条などが検出されている。

当地域の古墳時代後期に始まる集落跡の多くは、平安時代の初めまで継続し、奈良時代直前で終わる本遺跡の集落は例外的である。

これについて、奈良時代直前に広い台地上が集落の空白域となること、また、台地を分断する溝(SD01)が集落廃絶後に掘られ、これが野馬除けの施設であると推測すれば、牧の一部であった可能性が浮かんでくる。

当遺跡周辺では、野火付遺跡などで古代の埋葬馬が複数発見されており、聖原遺跡では焼印が出土するなど、馬に関連する資料が多い。また、当遺跡北側に東山道長倉駅家、南側に佐久郡衙があったと推定されている。そのため、生産された馬が駅馬、伝馬として供給されていた可能性がある。

牧の存在を検証するには、まず、牧と確定できる資料の蓄積が必要であろう。さらに、東山道や佐久郡衙の主要施設、郡衙間を結んだ伝路の検出などが今後の課題となろう。

野火附城跡 野火附遺跡と同じ台地の南西方に位置する。舌状部の根元を横切る堀、溝、土塁と、台地縁辺部を廻るピットを伴う溝(板塀)跡が見つかった。一方、城郭内部にあたる台地頂部では、土壌流出または削平が著しく、遺構などを把握することができなかった。堀や土塁からも出土遺物がなく、中世の城跡であることを考古資料から裏付けることはできなかった。



図50 野火附遺跡遺構全体図

IV 普及公開活動の概要

(1) 展示会・講演会

① 平成20年長野県埋蔵文化財センター速報展 「長野県の遺跡発掘2008」

〈長野県立歴史館会場〉

会 期：平成20年3月15日(土)～5月11日(日)

来館者：12,978名



熱心に銅戈をのぞき込み、担当者に質問する見学者

内 容：歴史を見直す大発見として話題となった柳沢遺跡出土の銅戈、銅鐸に加え、弥生時代の関連展示なども実施し、好評であった。

遺跡調査報告会 4月12日(土)

遺跡報告 西近津遺跡群ほか3遺跡

聴講者 127名

体験広場 5月3日(土)～6日(火)

参加者 333名

〈長野県伊那文化会館会場〉

会 期：平成20年7月10日(木)～8月3日(日)

来館者：2,009名

内 容：市町村の協力のもと「伊那谷の弥生時代」をテーマに、著名な遺跡の弥生土器等も展示した。

遺跡調査報告会・講演会 7月12日(土)

遺跡報告 柳沢遺跡ほか2遺跡

講演 「柳沢遺跡と南信の弥生文化」

長野県遺跡調査指導委員 笹澤 浩 氏

聴講者 111名

② 県庁ロビー展「長野県の遺跡発掘2009」

会 場：長野県庁1階ロビー

会 期：平成21年2月25日(水)～3月6日(金)

内 容：県教育委員会文化財・生涯学習課主催事業に協力し、県庁を訪れる人を対象に埋蔵文化財や当センターの業務を理解してもらうことを目的に、今年度調査された遺跡資料を展示した。

③ 「写真でみる長野県の遺跡発掘2009」

会 場：しなの鉄道屋代駅 千曲市民ギャラリー

会 期：平成21年3月17日(火)～3月25日(水)

内 容：長野県立歴史館で開催される速報展のイベントと位置づけ、最寄りの屋代駅構内で写真パネルを中心とした展示を行った。



伊那文化会館での講演会にも多くの聴講者が訪れた



県庁ロビーで埋蔵文化財調査の成果を紹介

(2) 現地説明会

県教育委員会との共催事業として、6遺跡で実施した。今年度、発掘作業の進み具合から、遺跡の見ごろが梅雨と秋雨の時期に重なり、雨にたたられる例が多かった。小雨決行した西近津遺跡群、立ヶ花表遺跡、柳沢遺跡、下村遺跡では熱心な考古学ファンに支えられ、盛況であった。一方、土砂降りとなった上五明条里水田址では、中止を余儀なくされた。

① 柳沢遺跡埋納坑見学会（県立歴史館屋外）

4月19日(日) 152名 晴

昨冬、県立歴史館内に運び込み、発掘作業を進めてきた青銅器埋納坑の完掘状態を公開した。速報展の期間中でもあり、展示室内で銅戈・銅鐸を見ていただき、屋外で復元模型等も使って、埋められていた状態や発掘状況の説明をおこなった。



完掘した埋納坑と模型に見入る見学者

② 田島塚・水堀塚（佐久市）

8月3日(日)・10日(日) 491名 晴

地元の要請で、中部横断自動車道臼田トンネルの工事現場見学会にあわせて開催した。発掘場所が工事ヤード内であり、安全管理の面から、事前登録をした切原地区住民限定という形となった。

③ 西近津遺跡群（佐久市）

9月7日(日) 250名 雨

3年連続の開催。毎回楽しみにしているとの声が聞こえ、天候の善し悪しに係わらず安定した参加者数があった。佐久市内での見学会が定着した。

④ 立ヶ花表遺跡（中野市）

9月13日(日) 76名 雨

濡れた斜面に気を遣いながら、登窯の構造につ



炎天下、尾根を登りきって水堀塚に到着して熱心に質問する姿が見られた。

⑤ 柳沢遺跡（中野市）

9月20日(土)・21日(日) 241名 晴/雨

二日目は雨のため、遺物見学のみとなった。

⑥ 下村遺跡（鶯ヶ城跡）

11月7日(金)・8日(土) 115名 雨/曇

発掘作業の見学も計画したが、雨により遺構・遺物の見学のみとなった。眼前に広がる山城の全景は、印象深かったとの感想がよせられた。

(3) ニュース ～みすずかる～の発行

今年度は、16号～18号の3冊を発行した。

16号（7月11日発行）上五明条里水田址を中心に、平安時代の八稜鏡の特集を組んだ。

17号（11月26日発行）立ヶ花表遺跡の奈良時代後半の窯跡他、調査中の遺跡を紹介した。

18号（3月5日発行）柳沢遺跡の弥生時代に作られた礫床木棺墓群を中心に取り上げた。



雨の合間を縫って説明を聞く参加者（西近津遺跡群）

V 研修、資料調査などの概要

(1) 講師招へいなどによる指導

月 日	所 属	職 氏名	内 容
6月26～28日 9月11～12日 2月26～27日 2月28～3月3日	愛媛大学法文学部	准教授 吉田 広	青銅器の実測について 柳沢遺跡調査指導委員会 柳沢遺跡出土銅戈実測方法について
7月10・11日 10月11・12日	明治大学	名誉教授 戸沢充則	竹佐中原遺跡等調査指導委員会 竹佐中原遺跡の調査について
7月10・11日	東北学院大学文学部	教授 佐川正敏	竹佐中原遺跡等調査指導委員会
7月11日 10月27日	伊那谷自然友の会	常任委員 松島信幸	竹佐中原遺跡等調査指導委員会、下村遺跡の調査について
7月11日	木曾町文化財保護審議会	委員 神村 透	竹佐中原遺跡調査指導委員会
7月10・11日	首都大学東京都市教養学部	教授 小野 昭	竹佐中原遺跡調査指導委員会
7月10・11日	東京大学文学部	教授 佐藤宏之	竹佐中原遺跡調査指導委員会、表町遺跡の調査について
7月11日	長野県立歴史館	専門主事 大竹憲昭	竹佐中原遺跡調査指導委員会
7月1日・12日 9月11～12日 10月16日 2月26・27日	柳沢遺跡調査指導委員会	委員長 笹澤 浩	柳沢遺跡の調査について 柳沢遺跡調査指導委員会
7月22日	野沢北高等学校	教諭 寺尾真純	田島塚の調査について
7月23・24日	愛知県埋蔵文化財センター	調査課長 城ヶ谷和広	立ヶ花表遺跡の調査について
7月31日	辰野高等学校	教諭 百瀬長秀	中村・外垣外遺跡出土土器について
8月22日 9月18日 2月3日 2月17日	別府大学	客員教授 宮本長二郎	西近津遺跡群の建物跡について 東條遺跡の建物跡について 西近津遺跡群の建物跡について
8月23日	安曇野市郷土博物館	館長 山田真一	立ヶ花表遺跡の調査について
8月29日 9月11・12日 10月4日 2月26・27日	信州大学理学部	教授 保柳康一	柳沢遺跡の土壌分析について 柳沢遺跡調査指導委員会
9月11・12日 2月26・27日	大阪府立狭山池博物館	館長 工楽善通	柳沢遺跡調査指導委員会
	奈良文化財研究所	考古第1研究室長 難波洋三	
	京都国立博物館	保存修理指導室長 村上 隆	
	明治大学文学部	教授 石川日出志	

月 日	所 属	職 氏名	内 容
9月1日 10月17日	信州大学教育学部	教授 赤羽貞幸	立ヶ花表遺跡の地形環境について 柳沢遺跡の地形環境について
10月1・2日	文化庁記念物課	文化財調査官 禰宜田佳男	柳沢遺跡の調査について
11月5日	信州大学人文学部	教授 笹本正治	下村遺跡の調査について
11月5日	飯田市上郷考古学博物館	館長 岡田正彦	下村遺跡の調査について
11月16・17日	NPO法人城郭遺産による 街づくり協議会	理事長 中井 均	下村遺跡の調査について
12月2・3日	首都大学東京 大学院	教授 山田昌久	東條遺跡出土木製品について
1月28日～30日 3月2～4日	京都大学	名誉教授 茂原信生	西近津遺跡群ほか出土の獣骨クリーニング 方法について、および鑑定

(2) 全埋協等への参加

期 日	会 議 名	開催地	参 加 者
4月25日	全国埋蔵文化財法人連絡協議会中部・北陸ブロック春季 連絡会	長野市	仁科松男 平林 彰 寺内隆夫 丸山道彦 窪田秀樹
5月15日・16日	平成20年度第1回全国埋蔵文化財法人連絡協議会役員会	山形市	平林 彰 (会計監査)
6月12日・13日	平成20年度全国埋蔵文化財法人連絡協議会総会	京都市	丑山修治 平林 彰
7月17日・18日	平成20年度全国埋蔵文化財法人連絡協議会コンピュータ 研究会	山口市	寺内隆夫 鶴田典昭 (副幹事)
10月9日・10日	平成20年度全国埋蔵文化財法人連絡協議会研修会	横浜市	市川隆之 藤松慎一郎
10月28日・29日	平成20年度関東甲信越静地区埋蔵文化財行政担当者会議	浜松市	櫻井秀雄
10月30日・31日	全国埋蔵文化財法人連絡協議会中部・北陸ブロック秋季 連絡会	静岡市	上田典男 窪田秀樹
11月20日・21日	関東甲信越静地区埋蔵文化財担当者協同研修協議会	茨城県	綿田弘実、柳澤 亮
12月2日	全国埋蔵文化財法人連絡協議会役員会	東京都	平林 彰 丸山道彦 (幹事)
2月4・5日	平成20年度第2回埋蔵文化財担当職員等講習会	福岡県	上田典男 廣田和穂
2月19日	平成20年度市町村埋蔵文化財担当者発掘調査技術研修会	千曲市	上田真・白沢勝彦・西香子・ 中野亮一・川崎保・贅田明・ 市川桂子・内堀団・曳地隆元

(3) 研修および資料調査

期 日	参加者	場 所	内 容
4月19日・20日	柳澤 亮	新潟県	新潟県立博物館 デジタルアーカイブ講習会
6月9日～13日	小林秀行	奈良県	奈良文化財研究所 専門研修「掘立柱建物・礎石建物遺構調査課程」
7月7日～23日	西 香子	奈良県	奈良文化財研究所 専門研修「文化財写真（基礎）課程」
7月24日・25日	小林秀行 中野亮一	栃木県 埼玉県	東條遺跡、表町遺跡の資料について
9月23日・24日	鶴田典昭	愛知県 神奈川県	竹佐中原遺跡の資料について
10月6日～10日	内堀 団	奈良県	奈良文化財研究所 専門研修「鉄製武器類調査課程」
10月20日～31日	鈴木時夫	奈良県	奈良文化財研究所 専門研修「遺跡測量課程」
10月21日・22日	寺内隆夫	埼玉県	埋蔵文化財調査の効率化・円滑化について
12月1日～5日	大沢泰智	奈良県	奈良文化財研究所 専門研修「自然科学的年代決定法課程」
12月11日～18日	曳地隆元	奈良県	奈良文化財研究所 専門研修「中近世城郭調査整備課程」
1月14日～23日	櫻井秀雄	奈良県	奈良文化財研究所 専門研修「報告書作成課程」
2月2日・3日	柳澤 亮 田中広明	岐阜県 静岡県	西近津遺跡群出土文字資料との比較調査
2月6日	上田典男 廣田和穂	福岡県	柳沢遺跡出土青銅器と北部九州出土青銅器の比較調査
2月5日・6日	平林 彰、若林 卓、櫻井秀雄	千曲市	長野県立歴史館 博物館講習会
2月17日～25日	古賀弘一	奈良県	奈良文化財研究所 専門研修「生物環境調査課程」
3月4日	岡村秀雄 市川桂子	千葉県	東條遺跡・社宮司遺跡の資料について
3月17日	廣田和穂	東京都	柳沢遺跡と山地遺跡出土銅戈との比較調査

(4) 考古学関係研究会・研修会・講演会での発表

月 日	派遣先	内 容	担当者
4月15日、 8月19日、 3月17日	市立小諸図書館	歴史を学ぶ講座『歴史・文化の再発見』『縄文時代の小諸』 「古代信仰の跡を探る」 「小諸の古墳」	櫻井秀雄
4月5日	県立歴史館	信州ふれあい歴史講座『発掘からみえる中世の社会』『礎石、木簡 そして土馬』『茅野市御社宮司遺跡と諏訪社の関わり』	岡村秀雄 河西克造
4月19日	県立歴史館	信州ふれあい歴史講座『縄文の人びとのくらし』『ヒスイ勾玉の起 源』『列をなす縄文時代の落とし穴』	川崎 保 中野亮一
4月26日	県立歴史館	信州ふれあい歴史講座『古代の人びとのくらしをさぐる』『古代堅 穴建物とかまど』『古代の文字資料』	内堀 団 上田 真
5月3日	県立歴史館	信州ふれあい歴史講座『出土品からみえる人びとのくらし』『江戸 時代の習俗』	廣田和穂

月 日	派遣先	内 容	担当者
5月10日	県立歴史館	信州ふれあい歴史講座『東アジア世界の日本』『旧石器時代の遺跡を読み解く』	鶴田典昭
5月25日	日本考古学協会	研究発表「駒形遺跡」「柳沢遺跡」	贅田 明 上田典男
5月31日	中野市中央公民館	中高新聞販売店会 信濃毎日新聞社「柳沢遺跡の銅戈・銅鐸」	上田典男
5月31日	県立歴史館	考古学講座「中世陶磁器の世界」	市川隆之
6月1日	特定非営利活動法人文化財保護活用機構	信州における弥生時代の青銅器「柳沢遺跡の青銅器埋納坑」	廣田和穂
6月8日	中野市間山公民館	「柳沢遺跡の神秘」	綿田弘実
6月21日	長野県考古学会	記念講演「中野市柳沢遺跡の調査」	綿田弘実
6月22日	日本旧石器学会	「南曾峯遺跡の調査概要」(ポスターセッション)	鶴田典昭
6月22日	上田市立信濃国分寺資料館	市民講座 「佐久市西近津遺跡群の調査と出土銅印」	柳澤 亮
7月21日	江戸遺跡研究会	江戸東京博物館 「高遠城武家屋敷の発掘調査について」	廣田和穂
8月8日	中野経済懇話会	例会「柳沢遺跡の銅戈・銅鐸とその背景について」	上田典男
9月5日	高井地方史研究会	中野市北部公民館「中野市柳沢遺跡について」	綿田弘実
10月21日	埼玉県埋蔵文化財調査事業団	所内研修会「柳沢遺跡の発掘調査」	廣田和穂
10月31日	県立歴史館	考古資料保存処理講習会「中野市柳沢遺跡の調査と保存処理」	白沢勝彦
11月4・11日	高山村公民館	講座『高山村再発見』『湯倉洞窟とその価値』『高山村遺跡とその保存』	綿田弘実
11月20日	波田町文化財リレー講座	「麻神遺跡の土面をめぐって」	平林 彰
11月22日	県立歴史館	考古学講座「器を超えたうつわ～縄文土器の世界～」	寺内隆夫
11月22日	阿智村東山道・園原ビジターセンター	「ははき木館」企画展展示講演会	櫻井秀雄
1月13日	長野市朝陽公民館	平成20年度朝陽公民館市民講座『あさひ大学』『ヒスイ勾玉の起源』	川崎 保
1月30日	中野市西部公民館	シニア大学「柳沢遺跡の発掘調査」	廣田和穂
1月31日、 2月14日	御代田町公民館	平成20年度歴史講座	櫻井秀雄
2月20日	埼玉県埋蔵文化財発掘調査事業団	所内研修会「長野県佐久市西近津遺跡群の発掘調査成果」	柳澤 亮
3月14日	社団法人金鶏会	考古学講座よみがえる縄文・弥生「続報 柳沢遺跡－青銅器を持つムラー」	上田典男

(5) 県内市町村および関係機関への協力・指導

期 日	依頼元	協力・指導内容	担当者
6月1日	特定非営利活動法人文化財保護活用機構	講演会『信州における弥生時代の青銅器』 後援	
6月25日	長野市篠ノ井内堀公民館	史跡探訪企画「埋蔵文化財センター見学」	上田典男
7月9日	中野市中央公民館	地域学習講座『ふるさとの歴史探訪』で柳沢遺跡見学	綿田弘実
7月26日 1月24・25日	国立歴史民俗博物館	「弥生農耕の起源と東アジア」に関する関東・中部研究会／平成20年度最終研究報告会	西 香子
9月5日	高井地方史研究会	中野市柳沢遺跡現地見学	廣田和穂
9月30日	国土交通省天竜川上流河川事務所	天竜川上流域災害教訓伝承手法検討会	平林 彰
10月13日	日本民俗建築学会	平成20年度日本民俗建築学会シンポジウム 後援	
10月25日・ 26日	文化財保存新潟県協議会	遺跡見学 柳沢遺跡、県立歴史館	廣田和穂 上田典男
10月30日	県立歴史館	平成20年度保存処理講習会 共催	
10月31日	中野市竹原郷土史研究会	遺跡見学 柳沢遺跡	綿田弘実
1月27日	阿智村教育委員会	中世山城といわれる「(仮称) 駒場城」の文化財指定に向けた現地確認踏査および保護施策等の指導	河西克造
2月19日	長野県教育委員会	平成20年度市町村埋蔵文化財担当者発掘調査技術研修会 共催	

(6) 学校への協力・指導

期 日	学校名	内 容	対応職員
4月30日	長野市立朝陽小学校	6年生授業「弥生時代の人びとの暮らし」	柳澤 亮
7月23日～30日	長野工業高等専門学校	実務訓練 4年生2名	綿田弘実
8月1日	長野市立安茂里小学校	犀北支会教職員研修会「柳沢遺跡の青銅器埋納坑について」	廣田和穂
8月4日	中野市教職員会	柳沢遺跡の見学・研修	綿田弘実
8月7日・8日	県立松代高等学校	ずくだせ修行 2年生1名	綿田弘実
8月20日	山ノ内町立山ノ内中学校	職員研究会 柳沢遺跡の見学	綿田弘実
10月16・17日	山ノ内町立山ノ内中学校	職場体験学習 2年生1名	綿田弘実
10月22日	長野市立篠ノ井西中学校	職場体験学習 2年生10名	上田典男
12月18日	中野市立高社中学校	柳沢遺跡について	白沢勝彦

(7) 資料等貸与一覧

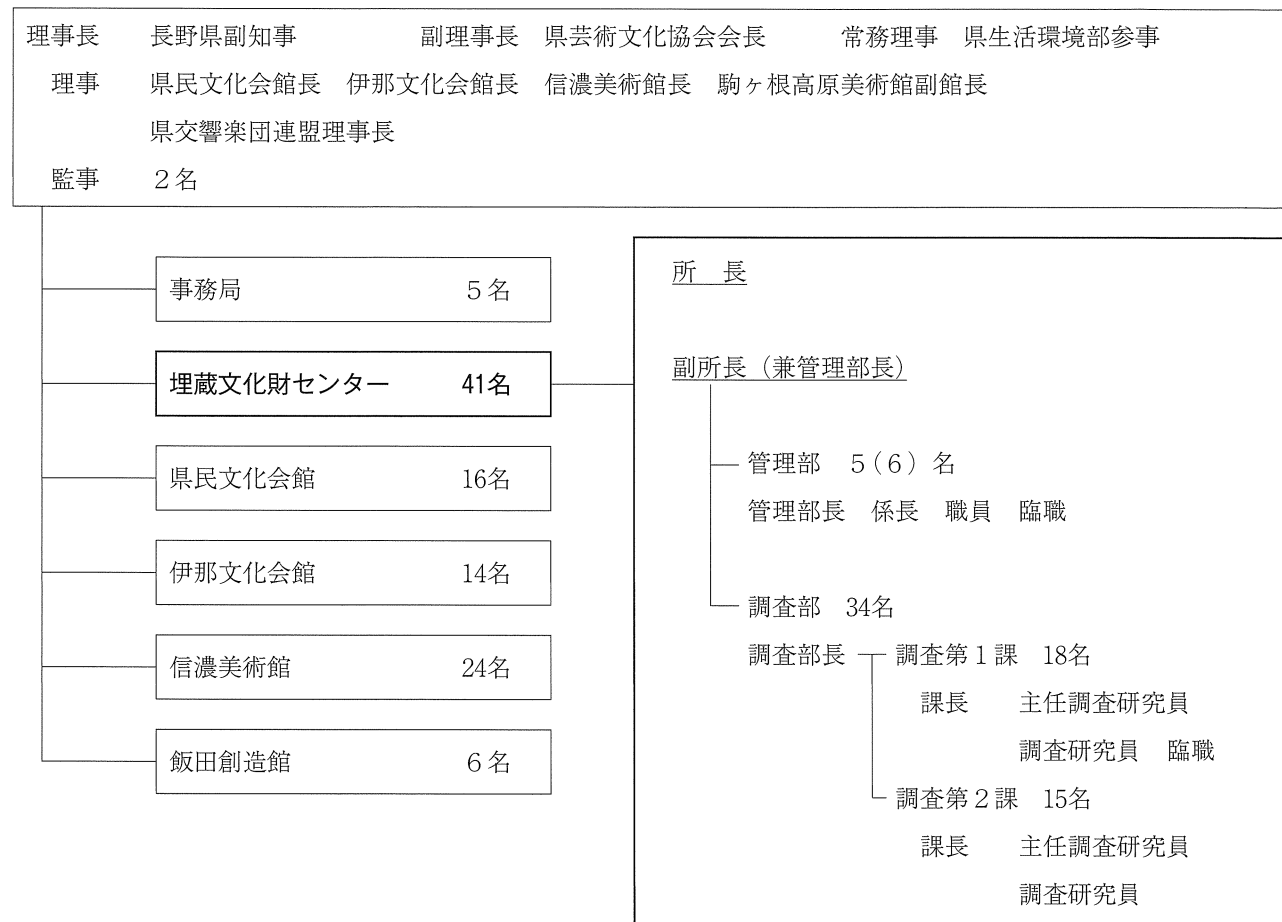
貸与先	貸与資料	貸与期間	備考
信濃毎日新聞出版部	柳沢遺跡関係写真	3月31日～5月31日	CD：3枚 35ミリスライド：41カット 67スライド：89スリーブ スライド管理台帳：1冊 図書：1冊
長野県立歴史館	力石条里遺跡群出土品	4月30日～7月4日	弥生中期 壺2点
浅間縄文ミュージアム	西近津遺跡群出土品	5月20日～6月30日	銅印1点 「郡」刻書土器1点
特定非営利活動法人文化財保護活用機構	柳沢遺跡 写真パネル	貸与	
株式会社光文社	柳沢遺跡 写真	提供	青銅器集合1点
朝日新聞出版 書籍編集部	柳沢遺跡 写真	提供	青銅器出土状況1点
松本市教育委員会	山の神遺跡発掘調査報告書掲載写真	転載許可	口絵写真 1点 第199図 1点
株式会社雄山閣	石川条里遺跡出土品写真 柳沢遺跡 写真	提供及び掲載許可	木製農具集合1点 遺跡景観、青銅器埋納坑、青銅器集合等7点
株式会社ジャパン通信	柳沢遺跡の青銅器写真ほか	転載許可	HP掲載写真・表・記事23点
長野県考古学会	柳沢遺跡関係の写真	6月30日～7月25日	遺跡及び遺構・遺物写真3点
東京法令出版	柳沢遺跡関係の写真	7月22日～8月15日	埋納坑及び銅鐸銅戈写真4点
新人物往来社	東條遺跡の写真	7月23日～8月22日	全景1点、笹塔婆1点
中野市教育委員会	柳沢遺跡出土青銅器	8月12日～8月19日	第2～7号銅戈銅鐸
ニュー・サイエンス社	柳沢遺跡青銅器埋納坑、青銅器写真	提供及び掲載許可	『月刊考古学ジャーナル』
長野県立歴史館	竹佐中原遺跡A地点石器及び写真	9月19日～12月2日	石器14点
株式会社すいれん社	西近津遺跡群出土銅印写真	提供	銅印写真2点
埼玉県立嵐山史跡の博物館	社宮司遺跡六角木幢写真	10月30日～12月8日	企画展写真パネル、図録
長野市民新聞社	社宮司遺跡六角木幢写真	提供	連載記事の参考写真
鬼灯書籍株式会社	西近津遺跡大型住居、銅印、刻書土器、西一里塚遺跡水田	転載許可	写真5点
信濃毎日新聞社	柳沢遺跡礫床木棺墓群写真	提供	2008年県内回顧 歴史編
浅間縄文ミュージアム	西近津遺跡群出土品 周防畑遺跡出土品	1月23日～2月27日	土製勾玉1、銅印1、「郡」刻書土器1、「大井」刻書・墨書土器4、古代瓦1、勾玉1等
文化庁	柳沢遺跡 写真	提供(『発掘された日本列島2009』)	遺跡景観、青銅器埋納坑、礫床木棺墓群、銅戈・銅鐸等 8点

VI 組織・事業の概要

(1) 組織

財団法人長野県文化振興事業団

【役員】 10名



(2) 職員（事務系臨時職員を除く）

H21. 3. 10現在

	所長	仁科松男	
	副所長	丑山修一	
管理部	管理部長(兼)	丑山修一	
	管理係長	窪田秀樹	
	職員	丸山道彦 荒城美枝子	
調査部	調査部長	平林 彰	
	調査課長	〔第1課〕 上田典男 〔第2課〕 寺内隆夫	
	主任調査研究員	〔第1課〕 綿田弘実 岡村秀雄 〔第2課〕 廣瀬昭弘	
	調査研究員	〔第1課〕	小林秀行 白沢勝彦 市川隆之 河西克造 若林 卓 鶴田典昭 西 香子 贄田 明 廣田和穂 市川桂子 寺内貴美子 山崎まゆみ 曳地隆元
		〔第2課〕	寺澤正俊 上田 真 藤原直人 中野亮一 藤松慎一郎 櫻井秀雄 川崎 保 柳澤 亮 古賀弘一 内堀 団 清水梨代 黒坂禎二 田中広明 (埼玉県埋文事業団から派遣)
		調査員	〔第1課〕 大沢泰智 鈴木時夫

(3) 事業

経費はH21. 3. 10現在

事業名		委託事業者	事業個所	事業内容	確定額(千円)	
受託事業	調査	中部横断自動車道	国土交通省 関東地方整備局	佐久市 西近津遺跡群ほか	発掘作業 整理作業	346,738
		一般国道18号 (坂城更埴バイパス)	国土交通省 関東地方整備局	千曲市 東條遺跡ほか	整理作業	35,484
		一般国道20号 (坂室バイパス)	国土交通省 関東地方整備局	茅野市 御社宮司遺跡ほか	整理作業	14,541
		一般国道474号 (飯橋道路)	国土交通省 中部地方整備局	飯田市 下村遺跡ほか	発掘作業 整理作業	88,732
		替佐・柳沢築堤	国土交通省 千曲川河川事務所	中野市 柳沢遺跡	発掘作業	123,165
		北陸新幹線	北陸新幹線建設局	長野市 立ヶ花表遺跡ほか	発掘作業	38,708
		(主)長野荒瀬原線 (四ツ屋バイパス)	長野建設事務所	飯綱町 表町遺跡ほか	整理作業	15,041
		(主)長野上田線 (カ石バイパス)	千曲建設事務所	坂城町 上五明条里水田址ほか	発掘作業	73,508
	上信越道佐久ジャンク ション	東日本高速道路株式会社	小諸市 中原遺跡ほか	整理作業	15,395	
研修	専門的知識技術の習得	県教育委員会	奈良文化財研究所	研修	218	
事業主	速報展など	7月：速報展 県伊那文化会館 3月：屋代市民ギャラリー展 随時：遺跡見学会				

長野県埋蔵文化財センター年報25 2008

発行日 平成21年3月19日

編集発行 (財)長野県文化振興事業団

長野県埋蔵文化財センター

〒388-8007 長野市篠ノ井布施高田963-4

電話：026-293-5926 FAX：026-293-8157

E-mail：maibun@grn.janis.or.jp

印刷 鬼灯書籍株式会社